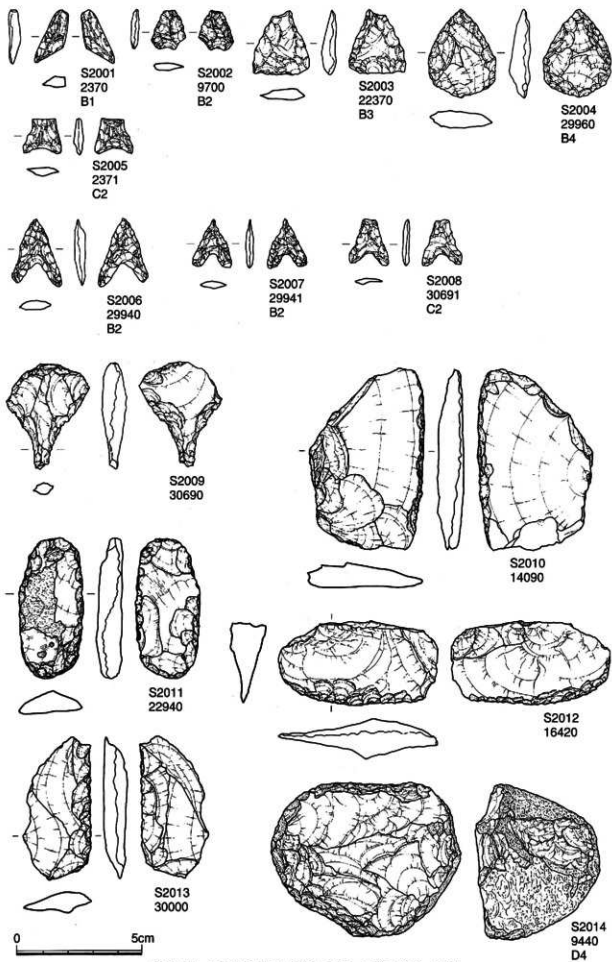
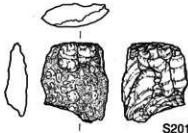


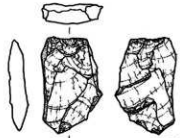
第3節 石器



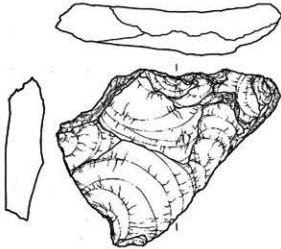
第274图 南区绳文中层(6期)石鏃・石鏃・削器・石核



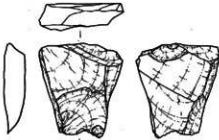
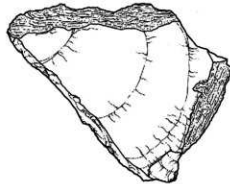
S2015  
30671  
B1



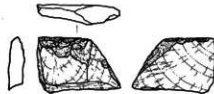
S2016  
30693  
B1



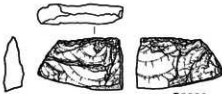
S2017  
30670  
B2P



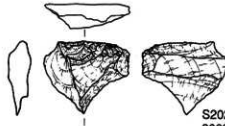
S2018  
30694  
B2P



S2019  
30692  
B2L



S2020  
30672  
B2L



S2021  
30695  
B3



第275図 南区縄文中層(6期) 楔形石器

## 第8章 縄文上層の遺構・遺物

この時期の遺物包含層は北区・中央区の全域で認められ、遺構についてもほぼ全域で認められた。ただ、北区北側のSD202以北には、この時期の遺構が認められないことからSD202は、この時期の集落の北端境界を示していると考えられる。

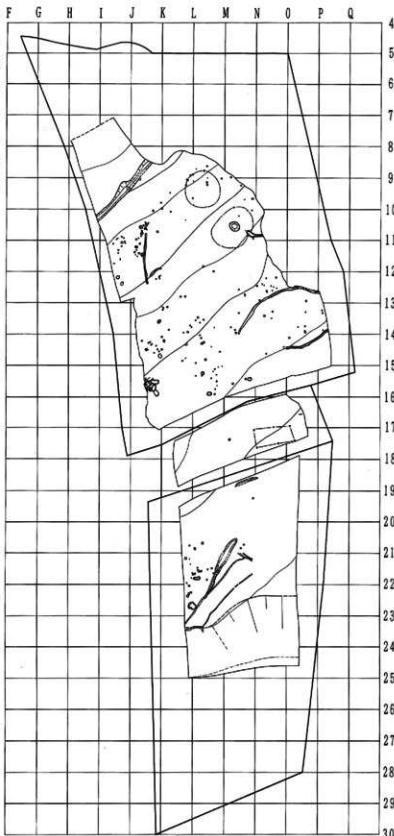
## 第1節 北区の遺構

(山本)

検出された遺構は、住居跡2棟、墓9基の他、サヌカイトの集積土坑(SK202)や複数の溝(SD202など)、多くの柱穴などである。

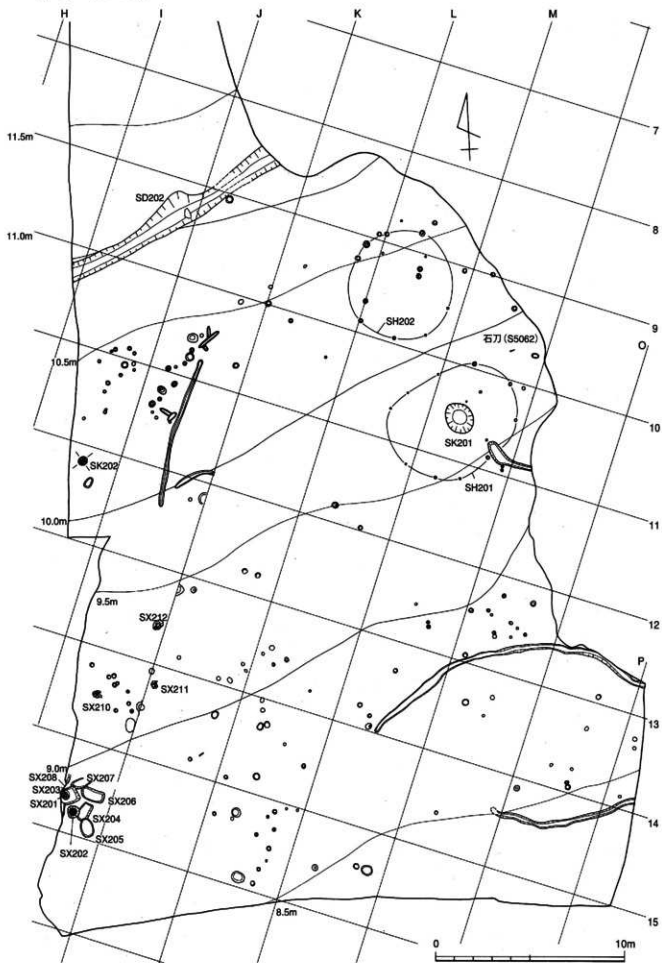
集落の北側を画する東西方向に検出されたSD202は、弥生時代以降の流路によって、切られているが、長さ15mに渡り検出できた。溝の幅は、検出面で平均1m程度で部分的に2m近くある。この溝の深さは30cm~40cmで灰色シルト質細砂が堆積し、断面形態(端正なU字形)から、人工的な溝であることは明らかである。先にも触れたように、この溝から北側(外側)には遺構が疎であることも考慮して、集落を画する溝と評価した(第277図)。

住居跡は、縄文下層の場合と同じで堅穴状には凹んでお

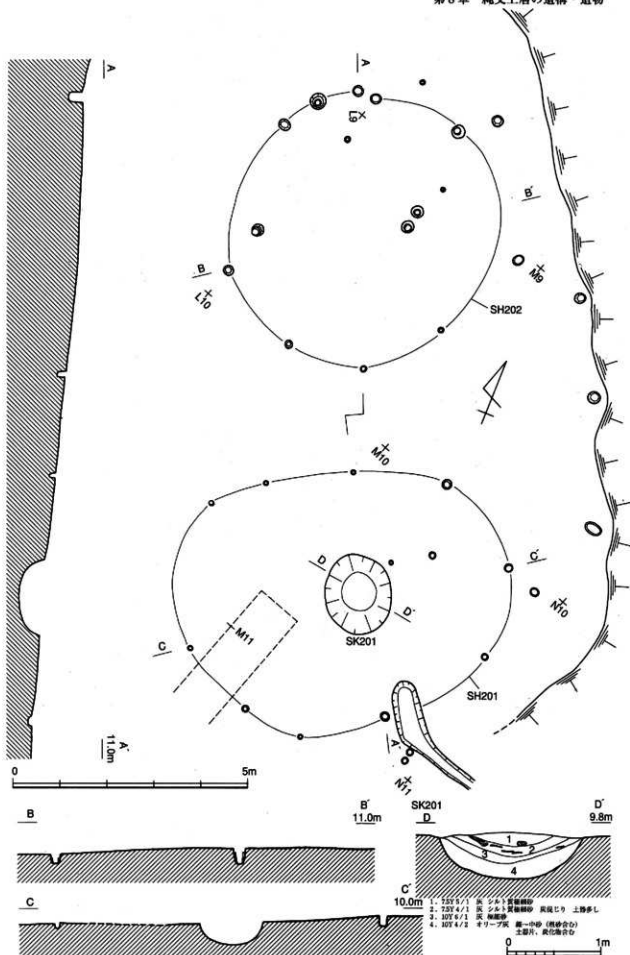


第276図 縄文上層遺構配置図

第1節 北区の遺構

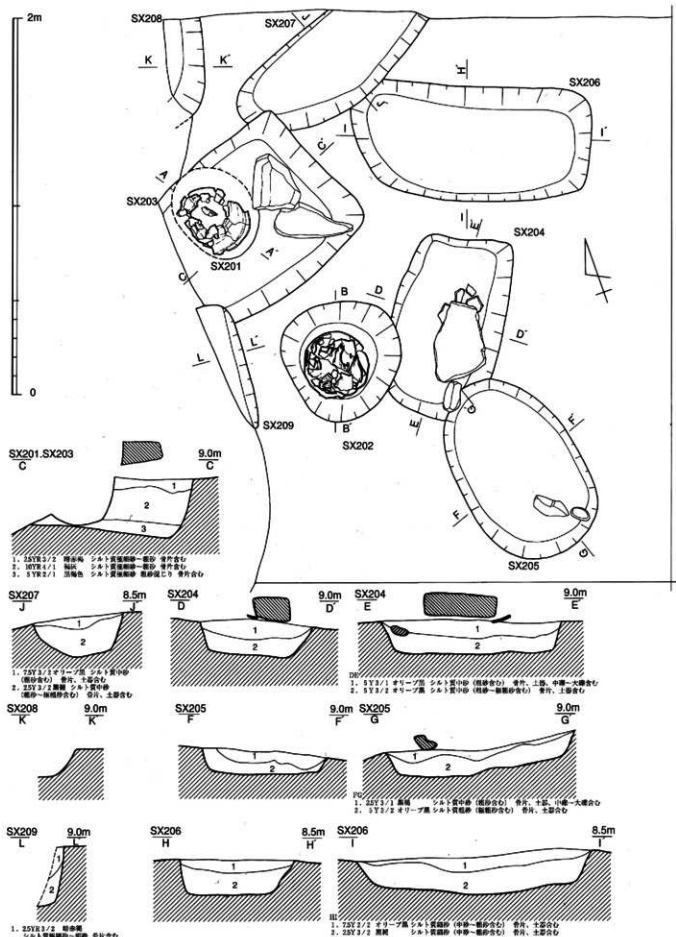


第277図 北区縄文上層遺構

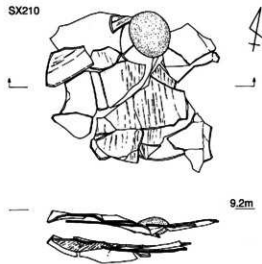
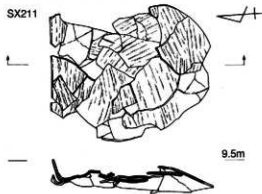
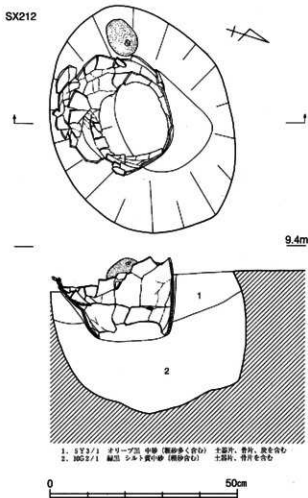
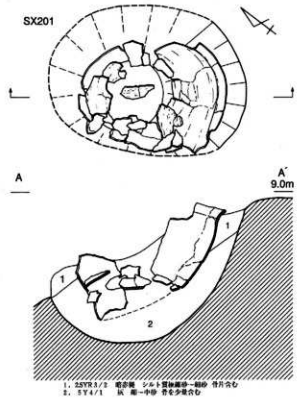
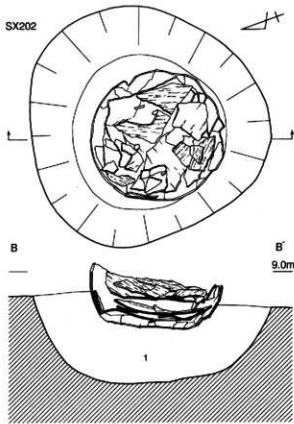


第278図 北区縄文上層住居跡群 (SH201・SH202)

第1節 北区の遺構



第279図 北区縄文上層埋設土器・土壌基群



第280図 北区縄文上層埋設土器

第38表 北区縄文上層住居跡一覧表

No.	長径 (cm)	短径 (cm)	平面形態	備考
SH 201	700	550	隅丸方形	中央土坑あり
SH 202	950	550	円形	

らず、柱穴の平面的位置関係や中央土坑などから判断して、推定している。

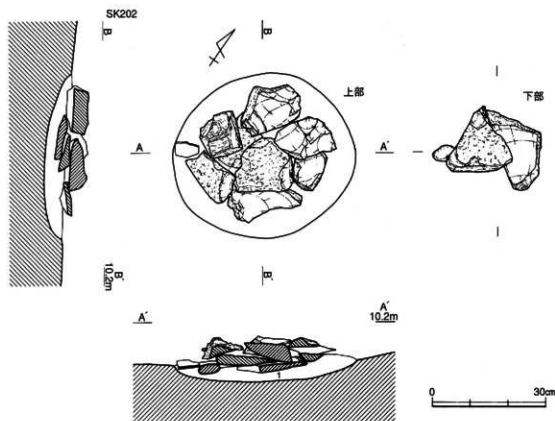
SH201は、柱穴の配列から、長径7.0m、短径5.5mの隅丸方形の住居跡と考えられる(第278図)。柱穴は10箇所検出され、直径7~9cm、深さ7~12cm程度のもので構成される。中央部に直径1.5m、深さ0.3mの中央土坑(SK201)を持ち、住居内から南側外部に向かって排水溝的な溝がのびる。この中央土坑内には炭混じりの灰色シルト質細砂が堆積しており、篠原式古段階の土器が出土している。

SH201は、柱穴

SH202は、直径5.5mの円形住居跡である。柱穴は9箇所検出され、直径8~14cm、深さ10~18cm程度のもので構成される(第278図)。この住居跡に伴う中央土坑などの施設は検出できなかった。また柱穴からも明確な時期決定できうる遺物もなかった。

SK202はI12区で検出されたサヌカイトの集積土坑である(第281図)。その規模は長径49cm、短径43cmの円形で、深さは5cm(検出面からの数値)で、サヌカイトの分割礫(剥片)が9点重なり合って出土した。土坑断面の観察から、12~13cmの深さがあったと思われる。サヌカイトの分割礫はどれも大形の剥片で、長さは15~20cm、厚さ2~6cm、重さ300~1300g程度のものである。サヌカイトの分析結果では香川県の金山産との結果がでており、縄文晩期の流通を考えると重要な遺構である。

J15区では、墓と考えられる遺構を9基検出した。その他の区では墓の可能性のある遺構が数カ所で見つかっているが、それぞれ単独で存在しており、この場所のみ群をなして検出された。内訳は、土器



第281図 北区縄文上層サヌカイト分割原石集積土坑



棺2基（S X 201、202）、土壌墓7基（S X 203～209）である。

S X 201は土器棺墓で、篠原式古段階に属する深鉢形土器を用いている。棺の掘り方は、長径50cm、短径40cmの楕円形で、深さは検出面から40cmであった（第279図）。S X 203との切り合い関係があり、S X 201の方が新しい。

S X 202も土器棺墓で、外容器には篠原式中段階の深鉢形土器を用いている。棺内部に落ち込んだ状態の土器の破片は、篠原式古段階に相当するものである。掘り方は長径31cm、短径30cmのやや不正形な円形で、検出面からの深さは23cmである（第279図）。土器棺は上部からの圧力によって下方に壊れているので、本来の掘り方上面は、検出面から数10cm上部であることが予想される。S X 202も S X 204の土壌墓の肩を切っており、時間的に後出であったことがわかる。

上記のように2基の土器棺墓 S X 201と S X 202は、この墓域の中でも後出のものであると言える。

S X 203は土壌墓群の南に位置し、長辺90cm以上、短辺90cmの方形を呈し、深さ30cmを測る。長辺東方の上面に30～40cmの巨礫が墓標的に2個設置されている。土壌内の堆積層は3層あり、いずれもシルト質極細砂が堆積しており種不明の骨片が出土した。土壌内の北寄りに S X 201が埋設されている。

S X 204は土壌墓群の西に位置し、長辺100cm、短辺60cmの長方形を呈し、深さ20cmを測る。長辺東方の上面に30×40cmの巨礫が墓標的に1個設置されている。石材直下には深鉢片が存在した。土壌内の堆積層は2層あり、いずれもシルト質中砂が堆積しており種不明の骨片が出土した。土壌西端は S X 202に切れ、南端は S X 205により切られている。

S X 205は土壌墓群の南端に位置し、長径103cm、短径66cmの長楕円形を呈し、深さ12cmを測る。南方の上面に20cmの大礫が存在する。石材直下には深鉢片が存在した。土壌内の堆積層は2層からなり、種不明の骨片が出土した。土壌北端は S X 204を切っている。

S X 206は土壌墓群の東に位置し、長径130cm以上、短径47cmの隅丸長方形を呈する。深さは18cmある。土壌内の堆積層は2層あり、いずれもシルト質細砂が堆積しており土器および種不明の骨片が出土した。土壌西端は S X 207に切られている。

S X 207は土壌墓群の北に位置し、長辺105cm以上、短辺60cm、深さ20cmを測り、東側は不明であるが、長楕円形を呈するものと考えられる。土壌内の堆積層は2層あり、いずれもシルト質中砂が堆積しており土器片および種不明の骨片が出土した。土壌西端は S X 203に切れ、南は S X 206を切っている。S X 208は土壌墓群の北西に位置するが土壌の殆どが失われているため正確な規模は不明であるが、50cm以上×15cm以上、深さ14cmを測る。

S X 209は土壌墓群の西に位置し、長辺100cm以上、短辺60cmの長方形を呈し、深さ20cmを測る。長辺東方の上面に30×40cmの巨礫が墓標的に1個設置されている。石材直下には深鉢

第39表 北区縄文上層土壌墓一覧表

No.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	断面形態	備考
SX201	50	40	40	楕円形	土器棺
SX202	31	30	23	楕円形	土器棺
SX203	90以上	90	30	方形	
SX204	100	60	20	方形	方形埋土上に置石
SX205	103	66	12	楕円形	
SX206	130以上	62	18	やや方形	
SX207	105以上	47	21	楕円形	
SX208	不明	不明	不明	不明	
SX209	不明	不明	不明	不明	

## 第1節 北区の遺構

片が存在した。土壌内の堆積層は2層あり、いずれもシルト質中砂が堆積しており種不明の骨片が出土した。土壌西端はS X 202に切られ、南端はS X 205により切られている。

これらの他にも、埋設された土器も認められる。S X 210 (J 14-13区出土)は上方からの圧力で押しつぶされているが、復元すると滋賀里Ⅲa式の深鉢形土器となった。土器に伴う掘り方は、認められなかった。土器は55cm×45cmの範囲にまとまって出土した。出土状態の厚みは15cm程度であるが、中間に5cm程度の空間が存在する。

S X 211 (K 14-2区出土)も埋設土器と考えられ、滋賀里Ⅲa式新相の深鉢形土器を使用している。これも掘り方は検出されなかった。土器は上方からの圧力で押しつぶされ、45cm×35cmの範囲にまとまり、厚さは10cm程度である。

S X 212 (J 13-23区出土)は、掘り方を伴う土器棺で、長径60cm×短径50cm以上の楕円形の掘り方で、深さは検出面から36cmである。土器を復元すると滋賀里Ⅲa式または篠原式の深鉢形土器で、下半部のみを検出であったので、本来の掘り方の上面は、検出面よりさらに上方であった可能性が高い。

## 第2節 中央区・南区の遺構

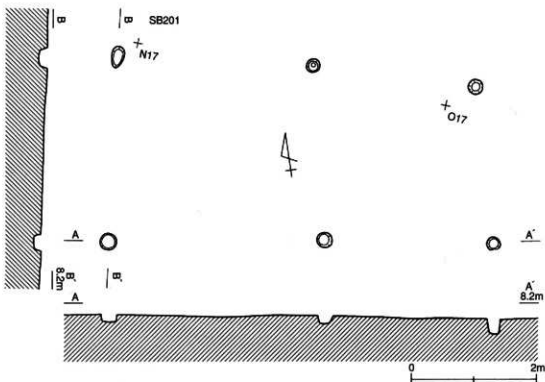
(山本)

中央区では縄文時代の上・中・下層の堆積が認められ、上層である黒色シルト層の下面において検出されたものとして建物跡（SB201）や土坑がある。また同時に検出された溝は縄文時代より新しい時期のものである。

SB201は中央区東端で柱列が検出されたもので、東西2間（6m）、南北1間（2.4～3.0m）の建物跡である。柱は直径15～20cm、深さ15～25cmである。西側の東西方向の柱の間隔は3.4m程度で、東側の間隔は2.7mである。南北方向は西端が3.0m、東端が2.4mを測る。東西方向の柱列が西に開くものの、柱通りが認められた。なお、周囲には掘り込みや窪みはなく、建物の中心部においても焼土・炭なども見られなかったため、竪穴住居跡や平地住居、掘立柱建物跡など種類が特定できないため建物跡とした。なおこれらの柱穴からの出土遺物はなかった。

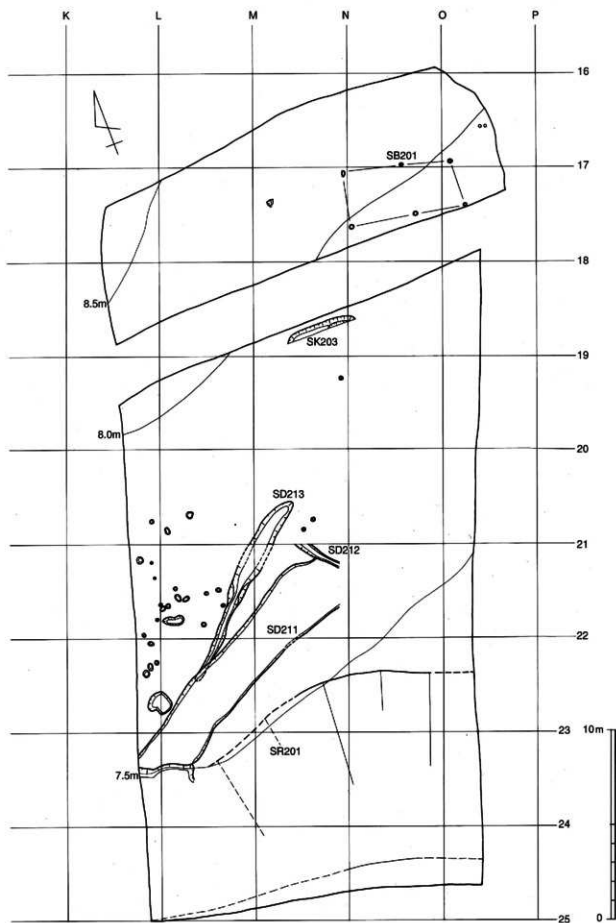
この地区ではこのほか住居跡などの明確な遺構を検出する事はできなかった。

南区では、溝3条、土坑2基、柱穴20余りを検出した。SD211（溝1）としたものは、幅3m、長さ15mを計るが、深さが平均3cmほどしか認められなかったので、溝というよりは、窪み状の地形を示している可能性が高い。SD212（溝2）は、長さ3mほどしか検出できなかったが、幅30cm～100cm、深さは最大30cmで、断面U字形を呈し、北区の北端を区画するSD202と同様の溝である。南区で検出できた遺構の分布を検討していると、土坑や柱穴はこの溝の北西側に集まっており、集落の何らかの区画を表す溝である可能性が指摘できる。



第282図 中央区・南区縄文上層掘立柱建物跡（SB201）

第2節 中央区・南区の遺構



第283図 中央区・南区縄文上層遺構

### 第3節 土器・土製品・石製品

各時期混在の様相を呈すが、主体は晩期にあると考えられる。晩期前半の滋賀Ⅲa式から篠原式にひとつのピークがあり、凸帯土器が少量混じる。

#### 1. 縄文晩期初頭までの土器（第284～286図） (岡田)

1099、1100は内彎する口縁の波状口縁深鉢波頂部。前者は対弦弧線を縦位に入組ませ、重直線がその両側に配されるものと思われ、その後、波頂部以下には竹管状工具による刺突が圧される。LR充填縄文、口縁上端部は無文である。他方1100は波頂部に縦位の隆帯を配し、それが二分するよう中心に1本の太い沈線を配す。それぞれには同様工具の押しひきによる刻み。その頂部には深い刺突が施される。摩滅顕著であるがLR縄文が確認できる。両者とも北白川上層式3期に比定されよう。1101も摩滅顕著な個体である。若干内折気味の口縁部に、台形に縁取られた突起が付けられている。1102には外面RL縄文。1104は生地精良の異質な土器で、器形も判然としない。粗めのLR原体による磨消縄文である。1105は波状口縁深鉢。上面観方形を呈し、その外接する角が逆「ノ」字状凸帯に類する。一方の内面には粘土が貼付され、そこに刺突が配される。口縁部外面にはキャタピラ状の巻貝回転擬縄文。1106、1107は注口付土器体部と思われる。前者は密に連続した刺突が平行に配される。その施文方向は向って左から右方。後者は腹部に刻み、刺突沈線と沈線併用して描かれた意匠内に二枚貝腹縁圧痕が擬縄文として充填されている。

1103は皿形浅鉢内面に逆「6」字状凸帯が配されているもの。凸帯両側には沈線が添い、その上および口縁内面上端は斜刻帯となる。また、胎土は所謂生駒西麓産のものに類似する。1108、1109は口縁波状を呈する同器形で、前者は波頂部内面に刺突を配した瘤状突起、その頂部および口縁内面には二枚貝押捺擬縄文が充填されている。後者は波頂部内面に巻貝殻頂刺突、口縁内面には斜刻帯を配す。生駒西麓産胎土か。内面には赤色顔料の付着が認められる。1110は小ぶりの広口鉢。上下を斜刻帯で押さえられた幅広い胴部文様帯には下弦連弧文が描かれる。1111も下弦連弧文が配されるが、定型的構成で、中央帯上限沈線も上弦の弧線となる平口縁浅鉢。上下は斜刻帯となるが、中央帯は二枚貝押捺充填による擬縄文である。1114は深鉢形土器の胴部下半。巻貝条痕地にRL縄文がみられるので、元住吉山I式の腹部近くにあたろう。その外面の一面に穀粒状の圧痕が認められるので注意されるが、その原体の特定はできていない。以上は一乗寺K式ないし元住吉山I式に比定される。

1112、1113は注口付土器の胴部で、後者の腹部には上に刻みを施した1本の凹線が巡る。前者は頭部直下の部分のみ胴部に対し段を設けて相違させ、そこを斜刻帯とする。以下は他にはみられない縦位回転の巻貝擬縄文。大ぶりの下弦弧線を描き、その内を磨り消すのも特徴的である。所謂生駒西麓産胎土をもつ。一方、後者は胎土中に結晶片岩が多混、紀ノ川流域産のものか。注口部は厚手で、体部下半の傾斜に沿うように上向、そのまわりを連続押し刺突が平行に巡るほか、両脇には巻貝による扇状圧痕が配される。胴部文様は旗状文がみられ、その内部にはキャタピラ状の巻貝回転擬縄文が充填されている。1117は内外面ともに凹線施文の広口深鉢か。口縁部および頸部外面の凹線は2本一組で間は斜刻帯となる。口縁内面にも斜刻帯。ただし、これらの凹線の工具は巻貝であると断定はできない。以上は元住吉山II式に比定されよう。

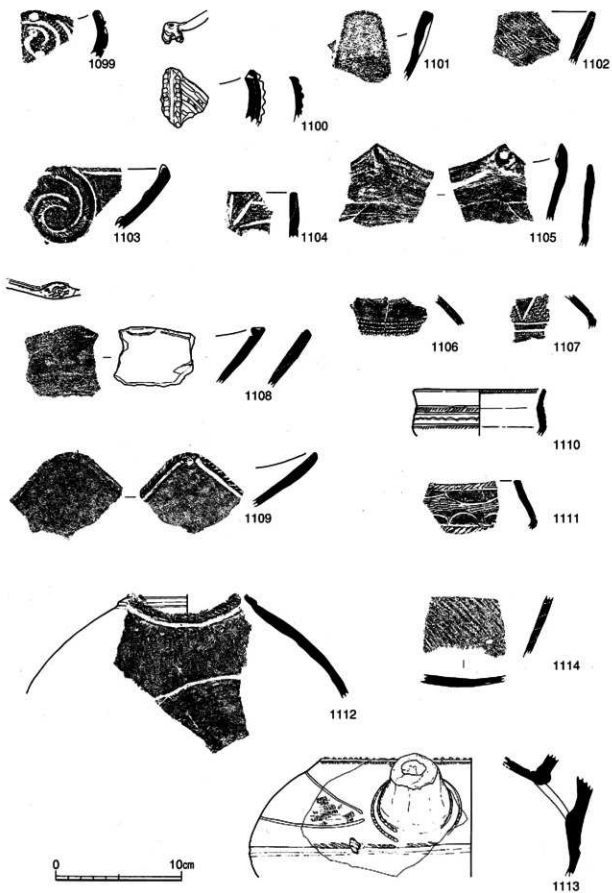
以下は宮流式に比定される。1115は幅広く内屈する口縁部をもつ平口縁深鉢。凹線は3本になるが、

2本は上端に寄って配され、最上のもは一部口唇にいたり、それにまるみをもたせる。外面の調整は丁寧である。1116は平口縁浅鉢か。口縁部に3本の凹線が配されるが、その上は口唇部まで比較的時間が取られ、凹線との境が一部不明瞭となるほど磨かれる。有段口縁とみなすことができる。1118は胴部から口頸部が内屈して立ち上がり、一体のものとして外反する広口浅鉢。口縁内面に施文はみられず、外面のみ凹線が配される。胴部下半が浅く、腹部の屈曲が強い。1119は皿形浅鉢となろうが、外面にのみ凹線がひかれる。脚付となるか。1120、1121は小ぶりの壺形を呈し、注口付となろう。いずれも胴部に凹線がみられるが、前者のそれは傾斜面に対し階段状となる。また、後者の腹部には刺突が打たれている。1122は平口縁浅鉢であるが、口縁部外反し1118の器形と相違は少ない。内面には沈線が1本ひかれるほか、外面はその上端、下端と二帯に渡って2本一組の凹線が配され、それぞれに巻貝による扇状圧痕が施される。なお、下位のそれにのみ粘土貼付があったように見受けられる。1128はやはり口縁部に扇状圧痕のみられる平口縁深鉢。口縁部は内屈してのるが、全体に外反、3本の凹線の配置も1118と同様となる。しかし、間が磨り消されてしまっているが、扇状圧痕は上下一連と見立てられるもので、その上端は開いて口唇部突起に、下端は側面圧痕として屈曲上に位置する。凹線は3本一組で頸部および胴部にも配され、それらは上方から磨かれることにより低平な階段状を呈す。外面は全面でなされてはいるが、凹凸の多い薄手の器壁である。

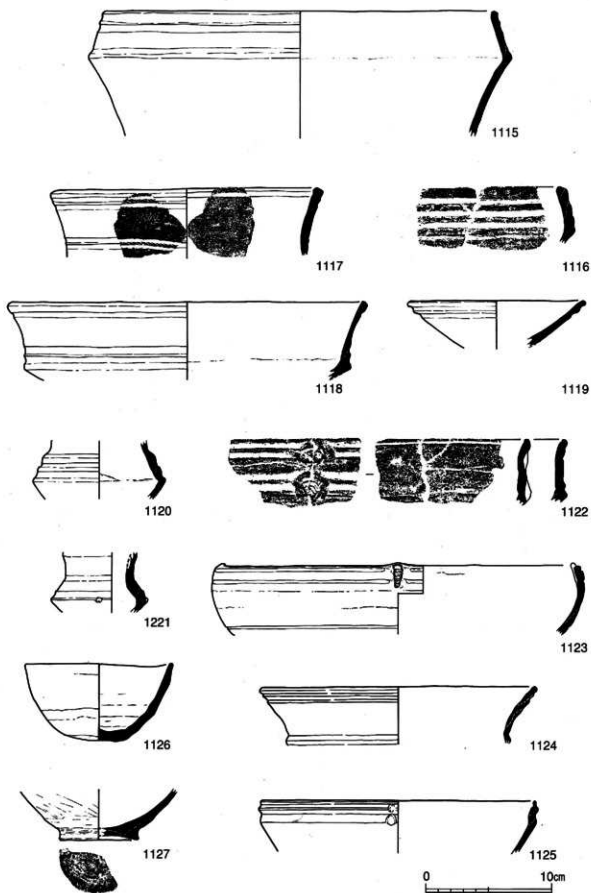
1123は遊賃里I式に比定される碗形浅鉢。口縁部および胴部にヘラ状工具によると思われる太目の沈線が2本一組で配されるが、その稜ははっきりしない。口唇部は一部突出、その外面には短凹線が縦位に引き降ろされ、単位文となる。1124は1118の系譜をひく広口浅鉢。口縁外面にはヘラ状工具を斜め上から当てるようにした太目の沈線が2本ひかれる。皿形を呈する胴部下半の内面に口頸部が取り付けられたもので、内屈部分以上の外反化が頸部に達した結果の所産。胴部下半上端の突出部分が段として頸胴部界を構成する。1125は緩く内屈する口縁部をもつ浅鉢形土器。外面には2本の凹線、外反気味の内面上端には屈折気味の沈線が配される。外面の凹線下端稜には2ヶ縦連の凹点がみられる。同様にして後期末・遊賃里I式に比定されよう。

1126は無文鉢形土器で、ナデ調整が施される。1127は深鉢底部。周壁は巻貝条痕が強く施された後なのでられるため段をなして凹み、下端が円盤状に突出する。底面は弱く凹む。1129は所謂生駒西麓産胎土をもつ無文浅鉢形土器。底部に近い破片下端は赤化しており、二次被熱を受けたものか。補修孔が穿たれている。1130も同器形、口縁端部は外面が一筋なでられることにより外方に突出、口唇部は幅のある平坦面をもつ。年代的位置づけは不明である。1131は波状口縁の浅鉢形土器で、碗形の胴部に外傾する短い口頸部が取り付け、その上端は外面に折り返されるようにして肥厚する。胴部外面は横走向の巻貝条痕が顕著にみられる。1132は外面巻貝条痕の深鉢形土器。外反して若干開く口頸部の上端には瘤状突起が付されている。

以下は後期末より晩期初頭におよぶ有文土器。1133は2本一組の浅い平行沈線文が描かれる、胴部上半が内傾する器形。1134は浅鉢形土器の内傾する口縁部か。沈線間には疎らな点状の刺突列が配される。1135も同器種類部か。外傾する口縁部には平行沈線がひかれ、その間に刻み列が配されているのが観察される。1136から1138は所謂標原式文様。前二者は鋭い刻目帯の間にそれが描かれている。また、1137は深い三角形抉りに関わらず、平行沈線が水平にひかれるのに対し、1138は三角形抉りの指す向きに沈線もつられて弧を描く。抉りは浅い。後二者とも内傾する器形。概ね遊賃里II式に比定されよう。

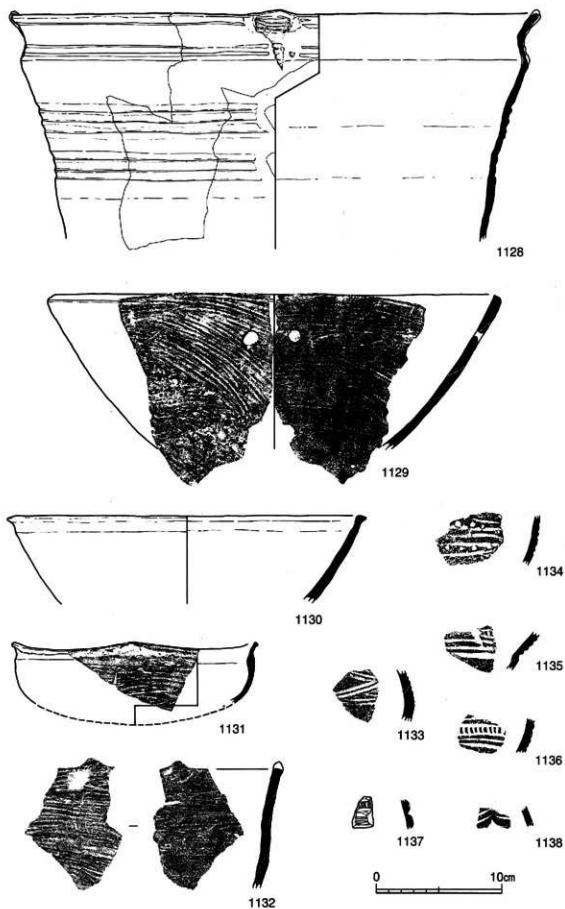


第284図 縄文上層出土後期土器-1



第285図 縄文上層出土後期土器-2





第286図 縄文上層出土後・晩期土器

## 2. 各層各地区出土縄文後期土器～補遺 (第287・288図)

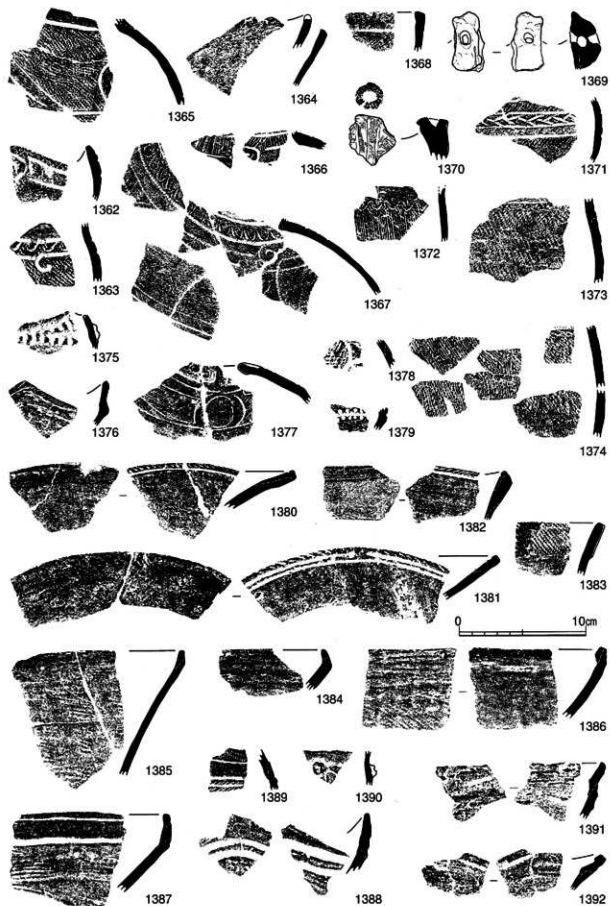
1139、1140および1362から1373までは南区縄文下層23層の時期に相当する土器。1139、1140ともに出土地区層位不明のもので、鉢形土器と考えられるが、前者の口縁は波状を呈する。内外とも沈線施文するが、外面の主要な沈線内には刺突が施される。縄文は直前段4本燃りのR Lで、最上帯には結節部の回転施文が認められる。磨消手法による施文。また、内外面ともに赤色顔料の付着が認められる。1140も直前段4本燃りR Lで、口縁上部部に結節縄文を配す。1141には原体不明の擬縄文が施されている。

1362は内壁内屈口縁の波状口縁深鉢で、波頂部には逆「6」字状の高巻文を配す。口縁上端は縄文帯とするが、結節縄文と思われるものが配されている。北区上層出土、摩滅顯著。1363は深鉢頸胴部。頸胴部界はなだらかに移行し、末端刺突の太目の沈線によって画される。最上帯は結節縄文、その直下には無文帯を置かずに、末端を刺突した逆「C」字状文が配されている。南区中層出土。1364は内壁口縁の無文波状口縁深鉢。338と同様の器形となろうが、本個体の波頂部には「V」字状の凹みがある。南L21区8・10層2回目出土。1365は257と同一個体となる注口付土器破片。頸部に向かってさらに粘土が接がれていることから、有頸形の器形になることが想定される。南N・O21区8・10層出土。1366および1367も注口付土器で、前者は縄文帯が条線文に替えられているもの。後者は密な刺突沈線で文様が構成され、最上帯に結び縄、その直下に「6」字状文が配される典型的な一乗寺K式である。南L20区8・10層3回目およびL20区9層出土。1368は年代を若干遡って、関東地方・堀之内Ⅱ式系の朝顔形深鉢であろう。摩滅著しいが、外面はL Rの縄文帯、内面には1本の沈線が引かれている。北区上層出土。1369は加曾利B1式の注口付土器把手。これも摩滅顯著で施文の有無は不明である。中央区中層出土。1370は波状口縁深鉢波頂部で、棒状の突起頂部には刺突が穿たれ、その頂部平坦面にL R縄文が施文される。外面も沈線施文後の充填縄文。北白川上層式3期併行期にあたる。南L20区8・10層5回目出土。1371は228と同一個体。ただし外面赤色顔料の付着は認められない。北区上層出土。1372から1374は縄文地深鉢の胴部。ただし1372は最上部に縄文結節部を回転施文するほか、縦位の条線で代用しており、1366と共通の指向が窺える。南K21区9層出土。1373の縄文は直前段2本燃りのR Lで、最上部に結節縄文を配す。南K L20区9層出土。縄文の特殊な1374は、882と同一個体。直前段3本燃りのR Lであるが、うち1本がL Lを用いており、結果「正反の合」となっている。いずれも摩滅著しいが、最上部は結節部回転施文の可能性もある。南L・M20区9層出土。

1375は波状口縁部に縦位に深く刻んだ隆帯を貼付するほか、口唇部も同様に刻む。東海地方・観塚Ⅲ式には同器種を認めるが、尾張地方以西に平口縁深鉢以外の器種の出土する例を知らない。摩滅も著しく、その可能性を指摘するに留める。北区上層出土。1376も波状口縁の波頂部であるが、突起等をもた



第287図 各地区各層出土縄文後期土器-1



第288図 各地区各層出土縄文後期土器-2

ない。K22区8・10層出土。1377はUFO形の注口付土器。有段口縁で上半無文帯には「ノ」字状凸帯、直下には「ノ」字状平行沈線文の反転した同心円文が配される。二枚貝押捺縄文が充填されている。南N20区8・10層出土である。1378と1379はともに南K20区8・10層から出土、同一個体と考えられる。前者は葉形の沈線文内を羽状縄文とし、後者は平行沈線間に穀粒状の刻みを充填する。小型の注口付土器になるものと想定され、北陸方面から搬入されたものと考えられる。外面には赤色顔料の付着が僅かに遺存する。1380から1382は口縁内面に斜刻帯を配す広口の鉢および浅鉢。1380は外折するようにして口縁部内面の大半を天に向ける器形で、全体形が想定しにくい。南区上層出土。1381は広口浅鉢であるが、内面沈線は2本、うち上位1本には末端刺突を2個一対で配し、空隙を設けている。刻みは比較的疎らで、元住吉山Ⅱ式に比定されよう。南K20区8・10層3回目出土。1382は口縁波状を呈すが、口縁部先端は極端に肥厚し、外向する口唇部は平坦に面取りされ、そこには平行沈線状のものが認められる。その意味で内屈口縁と広口口縁の折衷型である。頸胴部界には沈線が引かれて画されるようであり、若干の縄文と思われる施文痕跡がみられる。

1383から1386は無文土器であるが、1383は口縁部外面の薄く剥離した部分にRL縄文が施文されている。剥離部分は口縁部上端から幅約3cmで、その下端は段状に削り出されている。したがって、口縁部外面を肥厚させるための接着面と解することも可能。ただし、783のように突起等の付着物があった可能性も否定できない。南L20区8・10層5回目出土。1384は平口縁浅鉢であるが、口縁内屈部分は立ち上がり短い。1385は外面に明瞭な稜をつけることで内屈口縁と認定するが、内面の屈曲はなく、広口口縁に近接した形態をとる。南K20区8・10層出土。1386は内彎して立ち上がる口縁の内面に凸帯を貼付し、明瞭に肥厚させるが、類例を知らず時期等の判断は難しい。ただし、外面の巻貝条痕調整は後期後半の範疇を脱しないものである。南K20区8・10層出土。

1387から1389は元住吉山Ⅱ式。前二者は明瞭な凹線のみを描線としており、後者は波状口縁であるが突起を持たない。前者は元住吉山Ⅰ式と同様、上下に間隔を広くとった2本の平行凹線文。平口縁浅鉢である。1389は注口付土器の胴部。胴屈曲部上位に2本の平行凹線を配し、その間を斜刻帯とするほか、巻貝回転縄文を充填する沈線文が描かれている。1388が南K21区のほかは、L20区8・10層1回目出土。

1390は小型の土器の頸胴部であるが、器種は判然としない。刺突が施された瘤を中心に沈線文が配される。器壁薄く、よく磨かれている。1391は深鉢の口縁部であるが、器面調整のナデは粗く、はみ出し、砂粒の移動が顕著に認められる。ただし、外反する口縁部外面と内彎する口縁部直下内面は比較的丁寧になでられている。難はあるが遊賀里Ⅰ式に比定されようか。波状口縁浅鉢になる1392の内面は括るようにして段が設けられているが、外面においては口縁上端より若干下がった位置に、凸帯状のものの剥離痕が認められる。以上はいずれも出土地区層位が不明なものである。

### 3. 縄文晩期前半の土器 (第289～295図)

(深江)

縄文晩期前半期の掘遺跡では北区を中心としたベース面において円形状に立ち並ぶピットからなる住居跡を検出する集落域、及び埋壙・掘設土器等に見られる土器棺墓や土壙墓等を検出する墓域といった遺構の展開がなされ、遺物は包含層内にも広く出土した。特に、住居跡の中央土坑内出土の遺物は、出土状況から一括性の高さを待つ非常に良好な資料である。

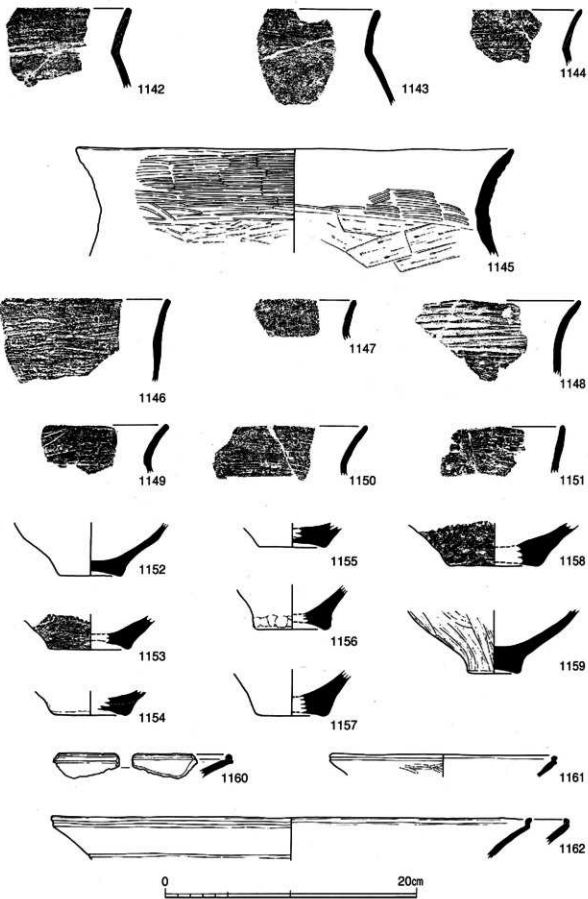
#### S H201中央土坑内出土遺物 (1142～1162)

1142～1151は、深鉢の口縁部である。1142は屈曲の緩い「く」の字状を呈する。屈曲部からはほぼ直

口気味に伸び、端部は丸く納める。口縁部外面は、横方向の二枚貝条痕の後ナデで仕上げ、胴部は右から左方向のケズリを施す。また、屈曲部外面には、横方向のナデを持つ。胴部内面はナデで、口縁部内面はヨコナデ調整で仕上げる。1143は屈曲の緩い「く」の字状を呈する。屈曲部からやや外反しながら立ち上がり、口縁端部で若干肥厚気味に丸く納める。口縁部外面から端部の器面調整は磨滅により不明確だが、条痕及びナデと考えられる。胴部外面は粗いナデ及びケズリで、内面と口縁部内面は丁寧なナデで仕上げる。1144は僅かに屈曲し、外反しながら立ち上がる細身の口縁部を持ち、端部は丸く納める。外面調整は、横方向の二枚貝条痕の後ナデで、内面はナデで仕上げる。1145は屈曲を持たず、やや外反しながら伸びるもので、口縁端部は細身でつまみ出した様な形態を呈する。復元径は約34.8cmを計る。口縁部外内面は、共に横方向の二枚貝条痕を施し、端部及び内面はナデで仕上げる。口頸部から胴部は右から左方向へのケズリを施す。1146は緩やかに外反しながらほぼ直口気味に伸びるもので、端部は上部で若干面を持つが丸味を帯びる。外面調整は二枚貝条痕を施す。口頸部下内面は磨削し、口縁端部にかけてナデ。1147は屈曲し、やや外反しながら短く開くもので、口縁端部は上部で若干面を持ち、外側へ微妙に肥厚する。外面調整は横方向の二枚貝条痕を施し、口縁部内面は条痕の後磨削し、胴部内面はナデで仕上げる。1148は屈曲を持たず緩やかに外反しながら伸びるものである。器面調整は外面は横方向の条痕を施し、内面は条痕の後磨削して仕上げる。1149は屈曲部からやや外反するもので、口縁端部は面取りを施し、内側へ微妙に肥厚する。器面調整は外内面共に条痕の後磨削して仕上げる。1150も屈曲部から若干外反するやや細身のもので、口縁端部は面取りを施す。器面調整は外内面共に条痕の後磨削して仕上げる。1151はほぼ直口するもので、口縁端部は面取りを施す。外面は条痕の後磨削し、内面はナデで仕上げる。

1152～1159は底部である。1152は小振りで浅い凹みをもつものである。底部側面から胴部にかけては、やや外反気味に立ち上がる。底面は粗いナデで、側面はヨコナデで仕上げる。また、胴部外面は下から上方向への板ナデ或いはケズリ、内面はナデを施す。1153は底面に比較的深めの凹みを持つ、薄手のものである。底部側面から胴部にかけてはやや外傾しながら立ち上がる。側面外面は条痕、内面はナデ調整で仕上げる。1154は粘土板上に腕状の立ち上がりを重ねたもので、底面にやや浅めの凹みを持つ。底面は粗いナデで仕上げ、側面外面には指頭圧痕後横方向のナデを施す。また、内面はナデで仕上げる。1155は小振りの底面に浅い凹みを持つやや厚手のもので、側面から胴部にかけては屈曲を持たずに外傾しながら立ち上がる。器面調整は外内面共にナデで仕上げる。1156は小振りの底面にやや深めの凹みを持つ薄手のものである。直口気味の側面は胴部にかけて屈曲しながら外反する。外面調整は磨滅のため不明ながら、側面に指頭圧痕を残す。また、内面はナデ調整で仕上げる。1157は底面に浅い凹みをもつ厚手のものである。僅かに外傾する側面は、胴部にかけて幾分屈曲しながら立ち上がる。器面調整は外内面共に磨滅のため不明ながら、内面はナデであろう。1158は大振りの底面に僅かな凹みを持つ平坦に近い厚手のもので、側面から胴部にかけては大きく外傾しながら立ち上がる。外面調整は条痕後磨削し、内面はナデで仕上げる。1159は突出の強い小振りで厚手のもので、底面に若干凹みを持つ。側面から胴部は腕状に立ち上がる。底面はナデ調整で仕上げ、胴部外面は縦方向のケズリを施す。また、内面はナデで仕上げる。

1160～1162は浅鉢の口縁部である。1160は外反する口唇部に丸味を帯びた玉縁状の端部を持つ。端部基部外面には1条の沈線、内面には決りを持つ。口唇部外内面は共にヨコナデ調整で仕上げる。1161は細身の口唇部に玉縁状に短く立ち上がる端部を持つ。端部基部外面には1条の沈線を施し、内面に



第289圖 縄文上層出土晩期土器（S H201）

は挟りを持つ。口唇部外面はミガキ、内面はミガキ後ナデを施し、端部付近はナデで仕上げる。1162は大きく外反する細身の口唇部に対して、直口よりやや外傾気味の板状の立ち上がりを持つ。端部の基部外面には1条の沈線を、内面には若干の挟りを持つ。また、上端部は面取りをする。復元径は約38.1cmを計る。口唇部外面にはナデ、内面にはミガキを施す。

以上のS H 201出土の遺物は、篠原式の古い段階のものと考えられ、極めて一括性が高い出土状況を示す事から、ほぼ同一時期と見て差し支えないようである。

#### 埋設土器 (1163・1164)

1163・1164は、晩期の墓地群に近接する深鉢の個体で、横倒位で出土したものである。遺構の性格としては実証性に欠けるものの、棺としての可能性を孕みながら便宜的に埋設土器と分類した。

1163は卵形形の胴部から口頸部で緩やかに窄まり、外反する口縁部を持つもので、底部は欠損する。胴部外面は下半部でやや左上がりの、上半部から口縁部にかけて横方向の二枚貝条痕を施し、口頸部外面はヨコナデで仕上げる。胴部内面は下半部で縦方向のナデ、上半部から口縁部にかけて横方向の条痕後磨り消して仕上げる。また、口縁端部では面取りを施す。滋賀里Ⅲ a式でも新しい様相を呈する。

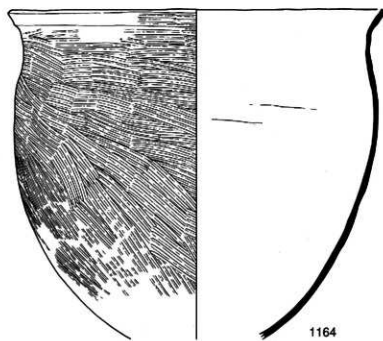
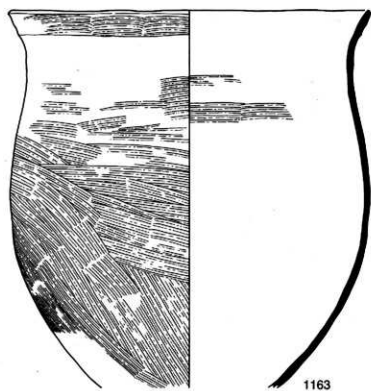
1164も卵形形の胴部から口頸部で僅かに屈曲を持ちながら緩やかに窄まり、外傾気味に開く口縁部を持つもので、底部は欠損する。胴部外面は下半部で磨滅により不明ながら中位にかけて左上がりの、中位から口縁部にかけて横方向の二枚貝条痕を施し、屈曲する口頸部外面には強いヨコナデによる1条の凹みを持つ。胴部内面は下半部で右から左方向のケズリ、中位から口頸部にかけて横方向の条痕後ヨコナデで撫で消す。また口縁部はヨコナデ調整で、端部は面取りを施す。滋賀里Ⅲ a式でも新しい様相を呈する。

#### S X 201、S X 202、S X 212 (1165・1166・1167・1168・1169)

1165~1169は、晩期の墓地群を構成する。またそれに近接する深鉢の個体で、ほぼ直立位で出土したものである。その内、1165・1166と1167・1168は、2個体が1土坑内で埋設されたものであり、土器棺としての性格付けは確定的と言える。また、1169は埋甕と呼称していたが、上部を削平により欠損しているものの、墓壇状の掘り方を持つ、直立位の埋設状況から積極的に棺としての性格付けを考える。

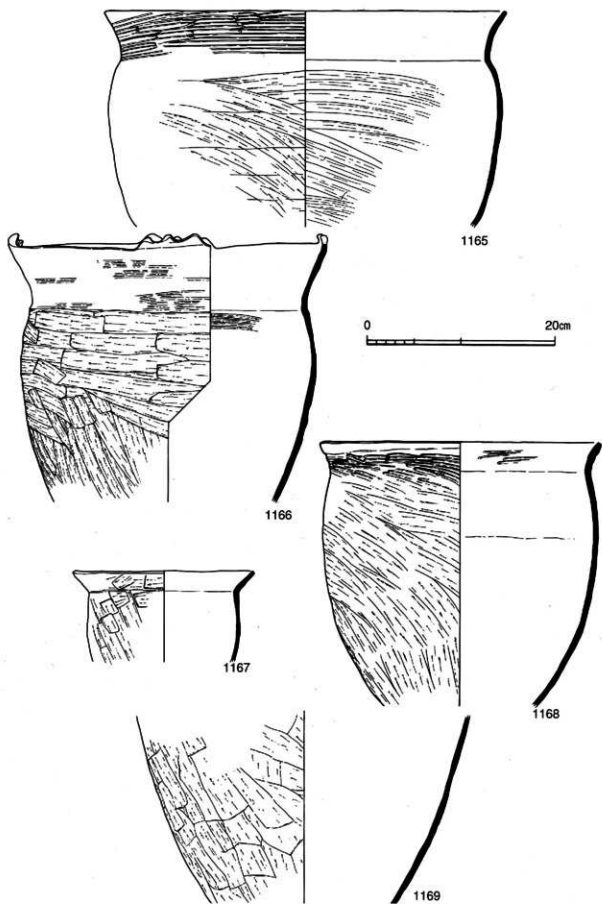
1165は棺身と考えられる1166の中に落ち込んだもので、棺蓋として使用されたものと考えられる。やや肩張りの卵形形を呈する胴部から口頸部で屈曲し、外反する口縁部を持つもので、胴下半部は欠損する。胴部外面は左から右方向へのケズリを施し、粘土接合痕も顕著に残る。口縁部外面には横方向の条痕を施し、屈曲する口頸部外面は強いヨコナデを残す。胴部内面は横方向を基調とした板ナデで、口縁部はナデ調整である。篠原式の古い段階のものであろう。

1166は土器棺の棺身となるものである。卵形形の胴部から口頸部で僅かに屈曲を持ちながら緩やかに外反し、内傾気味に伸びる口縁部を持つ。また、口縁端部には3個1対の山形状の突起を4箇所に配するもので、底部は欠損している。胴部外面は下半部から中位にかけて縦方向のケズリ、上半部に横方向のケズリを施す。口縁部外面は横方向の条痕の後ナデで仕上げる。胴部内面はナデで仕上げるが、上半部で僅かに横方向の条痕を残す。また、口縁部内面はヨコナデで仕上げる。篠原式中段階のものである。1167は1168内に落ち込んだ土器で、非常に小型ながら棺蓋として使用されたものである。砲弾形の胴部に緩い屈曲の「く」の字状を呈する口縁部を持つもので、やや内傾気味に立ち上がる口唇部を持つ。下半部以下は欠損する。胴部外面は中位から上半部にかけてかき上げる縦方向のケズリ、口頸部付近外面では横方向のケズリを施す。胴部内面から口縁端部は、不明ながらナデ調整であらう。篠原式の古い段



第290図 縄文上層出土晩期埋設土器-1





第291図 縄文上層出土晩期埋設土器-2

階と考えられる。

1168は土器棺の棺身となるものである。器形は、傘筒形の胴部から口頸部で僅かに窄まりながら外反する口縁部を持つもので、口縁端部は若干肥厚し、面取りを施す。また、底部は欠損する。胴部外面は底部付近に当たる部分で下から上へかき上げる縦方向のケズリで、中位から口頸部までは左上へかき上げる斜方向のケズリで仕上げる。口縁部外面は横方向の条痕を施す。胴部内面はナデ、口縁部内面は横方向の条痕の後ナデを施す。篠原式の古い段階と考えられる。

1169は土器棺の棺身としての性格が考えられるSX212である。器種は深鉢であるが、底部付近は欠損し、上半部以上も後世の削平により欠損している。外面調整は左上がりのケズリを施し、内面調整は右から左の横方向のナデで仕上げる。時期の限定は困難であるが、滋賀里Ⅲa式から篠原式古段階の範疇に入るものと考えられる。

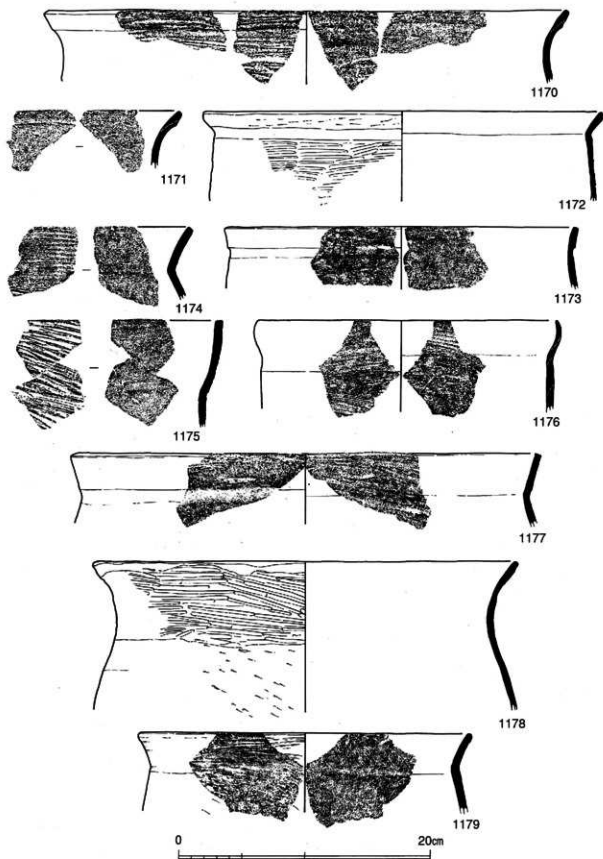
包含層出土の土器（1170～1216）

・深鉢（1170～1189・1191）

1170・1171は、外反する口縁部で、口縁端部から若干下の口縁部外面には横方向の強い二枚貝条痕等の器面調整による稜を持つ。また、口縁端部付近についても二枚貝条痕やナデ調整で仕上げ、端部は面取りする。時期は滋賀里Ⅲa式である。

1172は比較的窄まりが小さく立ち上がり、緩い屈曲をもって開く口縁部を持つ。屈曲部外面には1条の強いナデ調整を施し、胴部外面は二枚貝条痕を、口縁部外面はケズリで仕上げる。内面調整はナデである。滋賀里Ⅲa式新相である。1173は直口気味に立ち上がる口縁部で、殆ど屈曲を持たないが頸部付近で1条の強いナデを施す。外内面調整はヨコナデを基本とし、口縁上端部は面取りを施す。滋賀里Ⅲa式新相である。1174はやや外反する「く」の字状を呈する。口縁端部は面取りにより四角形状に納める。口縁屈曲部外面にはナデ調整を施す他、外面調整は二枚貝条痕で仕上げる。また、内面はナデ調整を基本とする。滋賀里Ⅲa式新相と考えられる。1175は直口気味に立ち上がりながら、屈曲部よりやや内彎する口縁部である。口縁端部は微妙に肥厚し、面取りを施す。口縁屈曲部外面には沈線状のヨコナデ調整が僅かに残る。外面調整は斜方向の条痕で、内面はナデ調整を基本とする。滋賀里Ⅲa式新相と考えられる。1176は、直口気味に立ち上がりながら、屈曲部より内彎する口縁部である。口縁端部は、薄身になりながら丸く納める。口縁屈曲部外面付近は横方向の二枚貝条痕を施し、胴部外面はケズリ及びナデ調整で仕上げる。内面はナデ調整を基本とするが、口縁部は条痕を残す。滋賀里Ⅲa式新相から篠原式古相と考えられる。1177は、屈曲の緩い「く」の字状を呈し、やや直口気味に開く。口縁端部は面取りを施し、断面を四角形状に納める。口縁屈曲部外面には1条のやや強めのナデ調整を施す。外面調整は、ヨコナデであり、内面は右から左方向へのヘラケズリで仕上げる。滋賀里Ⅲa式新相である。

1178は外反しながら開く口縁部を持つ。口縁屈曲部から口縁端部付近の外面は、横方向の二枚貝条痕を施し、以下は横方向を基本としたケズリ調整である。また、内面調整は右から左方向のケズリで仕上げる。篠原式古段階と考えられる。1179は、僅かに外反する「く」の字状を呈する口縁部である。口縁端部は丸く納める。外面は口縁屈曲部以上は横方向の二枚貝条痕で、以下は横方向のケズリで仕上げる。また内面調整は、横方向のナデを基本とする。篠原式古段階から中段階と考えられる。1180は、小さく窄まり、やや外反しながら直口気味に延びる口縁部を持つ。口縁端部は薄身に丸く納める。口縁屈曲部外面には1条のやや強めのヨコナデが施され、口縁端部にかけて横方向を基調とした条痕で仕上げる。また胴部外面は、斜方向のケズリで仕上げる。内面調整は、横方向のナデである。篠原式中段階で



第292図 縄文上層出土晩期前・中葉深鉢-1

ろう。1181は僅かに屈曲し、直口気味に延びる「く」の字状を呈する。口縁端部は丸く納める。外面調整は横方向のケズリで、特に屈曲部分において顕著である。内面調整はナデを基本としたものであろう。篠原式古段階から中段階のものと考えられる。

1182はやや外反しながら短く立ち上がる「く」の字状を呈する口縁部である。口縁端部は丸く納める。口縁屈曲部にはやや強めにヨコナデを施すことで外反を強調しており、口縁端部にかけてもヨコナデ調整を施す。また、胴部外面は横方向のケズリで仕上げる。内面調整はヨコナデを基本とする。篠原式中段階である。

1183は直行気味の胴部からやや外反しながら延びる口縁部を持つ。口縁部外面は、特に屈曲部付近で横方向の条痕が残り、胴部外面は横方向のケズリを施す。また、胴部内面は横方向の板ナデ調整で、口縁部内面はヨコナデで仕上げる。篠原式中段階である。

1184は外傾する口縁部である。口縁端部は断面四角形状を呈し、面を成す。口縁上端部には、逆D字状のキザミを付す。器面調整は、外内面共に横方向のナデである。篠原式新段階と考えられる。1185は直口気味の口縁部である。口縁端部は丸味を帯びた四角形状を呈し、上端部には指腹押圧によるきざみを付す。器面調整は外内面共に横方向のナデである。篠原式中段階、または新段階と考えられる。1186はやや外傾する口縁部である。口縁端部は丸く納める。口縁端部にはキザミを付す。器面調整は外内面共に横方向を基本としたナデで仕上げる。篠原式中段階から新段階と考えられる。1187は強く窄まる屈曲部から短く外反する「く」の字状を呈する口縁部である。口縁端部は丸く納め、上端部にキザミを付す。口縁屈曲部外面には1条の深い沈線を持つ他、数条の沈線を肩部外面に持つ。器面調整は外内面共にナデである。北陸地方、中屋式に類似の意匠のものがある。

1188はやや内彎する屈曲を持たない口縁部を持つ。器形は、砲弾形を呈するものと考えられる。口縁端部は若干細身になりながら丸く納める。外面には接合痕を残し、ケズリで仕上げる。内面は横方向を基本とするナデ調整を施す。篠原式でも前平代の資料と考えられる。

1189は4箇所隆起部を持つと考えられる波状口縁で、緩やかに窄まり外反する形態を呈する。やや厚気味の口縁端部は、面取りをする。外面調整は二枚貝条痕を基本とするが、特に屈曲部では横方向の条痕が顕著である。また内面調整は横方向のナデを基本とする。篠原式中段階と考えられる。

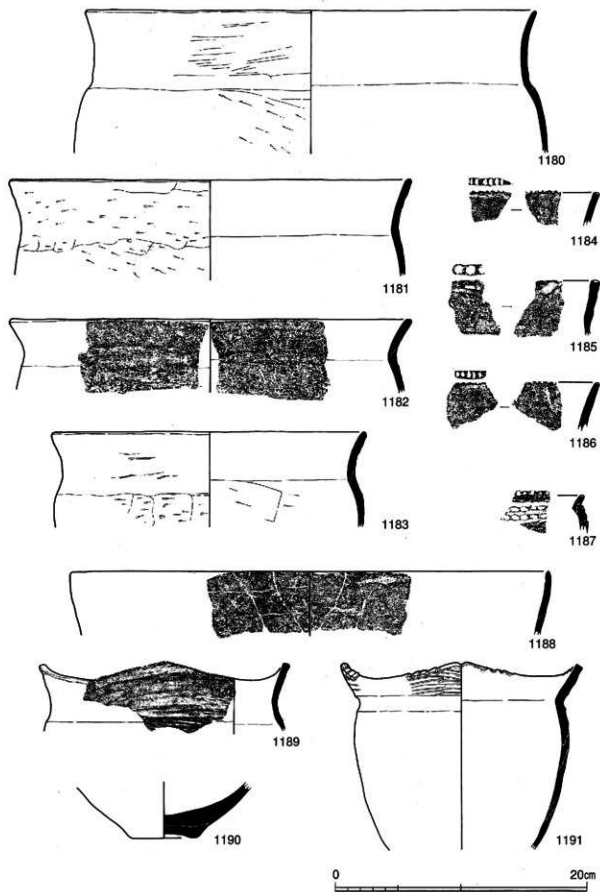
1191は1189と同様に波状口縁を持つものである。底部は欠損するが、卵例形を呈する胴部で、「く」の字状に屈曲する口縁を持つ。口縁端部は丸く納め、上端部にキザミを付す。口縁屈曲部外面には、1条の強いヨコナデ調整を施し、口縁端部までは横方向の条痕で仕上げる。胴部外面、及び内面の調整は磨滅により不明である。本遺物は、口縁部外面に横方向の条痕、また口縁屈曲部外面に強いヨコナデ調整を施すなど、滋賀里Ⅲa式の要素を持ちながら、口縁上端部にキザミを持つといった、篠原式でも中段階に比定される様な新しい要素が窺える。従って、時期的には滋賀里Ⅲa式新相から篠原式古段階に当てはまるものと考えられる。

1190は底部である。形態は、平底ながら僅かに凹底状を呈している。外面には粘土接合痕が残り、器面調整は外内面共にナデで仕上げる。時期の特定は明確でないが、凹底状の形態が後期以来の伝統を引き継ぐものであるとすれば、篠原式中段階までの範囲で考えても良いであろう。

#### ・浅鉢 (1192～1216)

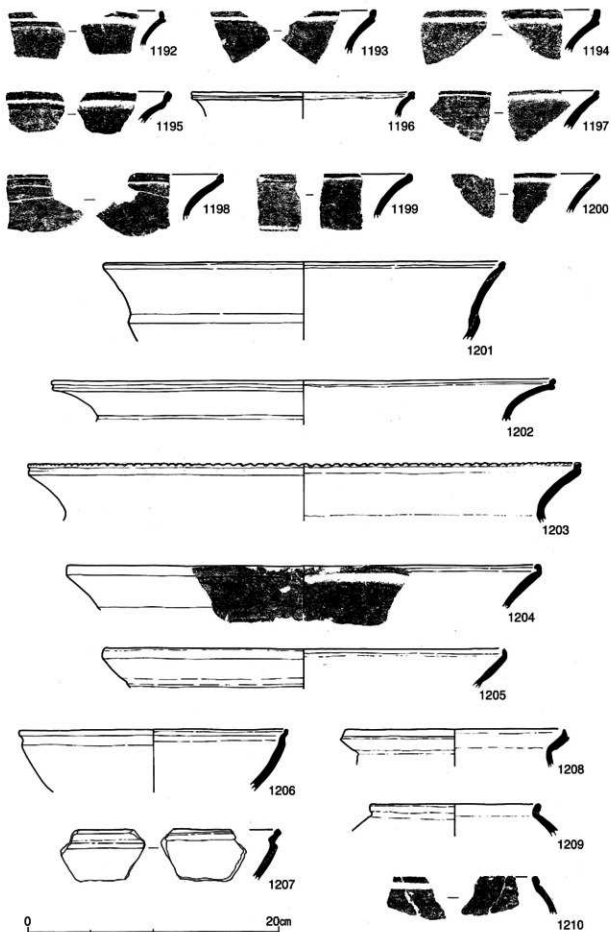
浅鉢は肩部から頸部の資料が殆どである。

1192は外反しながら延びる頸部に対して、ほぼ直角の板状を呈する立ち上がりを持つもので、立ち上



第293図 縄文上層出土晩期前・中葉深鉢-2

第3節 土器・土製品・石製品

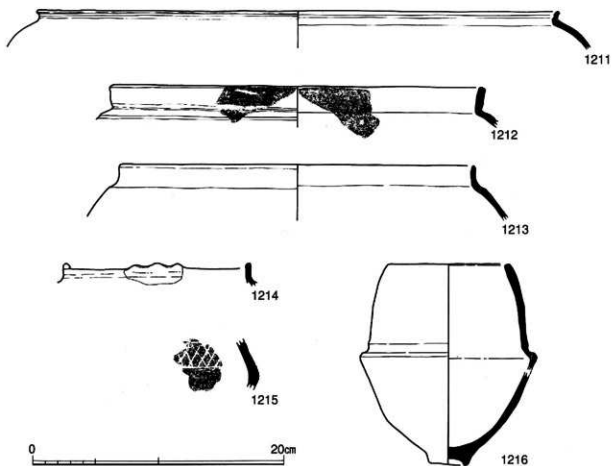


第294図 縄文上層出土晩期前・中葉浅鉢-1

がりの基部外面において1条の沈線を持つ。頸部外内面は共に横方向のミガキを施し、立ち上がり部分はヨコナデ調整で仕上げ、端部を面取りする。滋賀里Ⅲ a 式の新相であろう。1193はやや肥厚しながら外反する頸部に対して、直角よりもやや外傾気味に板状の立ち上がりを持つもので、立ち上がりの基部外面に僅かながら1条の沈線を持つ。頸部外内面共にミガキを施し、立ち上がり部分はヨコナデ調整で仕上げ、端部を面取りする。滋賀里Ⅲ a 式の新相と考えられる。1194も外反する頸部に対して、直角よりもやや外傾気味に板状の立ち上がりを持つもので、立ち上がりの基部外面に1条の沈線を持つ。頸部外面はヨコナデ調整、内面は横方向のミガキを施す。立ち上がりはヨコナデ調整で仕上げ、端部を面取りする。滋賀里Ⅲ a 式であろう。1195は外反する頸部に対して、1194等よりもやや大きめに外傾する板状の立ち上がりを持つが、立ち上がりの基部外面に付す1条沈線に対応する内面においてナデによる凹みがあることから、立ち上がり突起状を成す。頸部外内面は共に横方向のナデ調整を施し、立ち上がりはヨコナデ調整で仕上げ、端部を面取りする。滋賀里Ⅲ a 式よりも古相を示すと考えられる。

1196は外反する頸部に、やや丸みを帯びた断面四角形の突起状の立ち上がりを持つもので、立ち上がりの基部外面には1条の沈線を持つ。頸部外内面は共にミガキを施し、立ち上がりの部分はヨコナデ調整で仕上げる。篠原式の古段階と考えられる。

1197はやや外反気味の頸部に対して、やや外傾気味の、板状の短い立ち上がりを持つもので、立ち上がり基部外面には1条の沈線を、内面には若干の抉りを持つ。頸部外面はヨコナデ、内面はミガキを施



第295図 縄文上層出土晩期前・中葉浅鉢-2

し、立ち上がりはヨコナデ調整で仕上げる。滋賀里Ⅲ a 式新相から篠原式古段階であろう。

1198は外反する頸部に、やや丸みを帯びた突起状の立ち上がりを持つもので、立ち上がりの端部はナデによるものか、或いは端部折り曲げにより内傾気味に仕上がる。また、立ち上がり基部外面には1条の沈線を、内面には僅かに段を持つ。頸部外内面は共にミガキを施し、立ち上がりの部分はヨコナデ調整で仕上げる。篠原式古段階と考えられる。

1199は頸部と胴部との境に段状の若干の凹みを持ち、やや肥厚気味に外反する頸部に丸みを帯びた立ち上がりを持つもので、立ち上がり基部内面には僅かに抉りを持つ。頸部外面はミガキを、内面はナデ及びミガキを施し、立ち上がり部分はナデで仕上げる。篠原式古段階ないし中段階と考えられる。

1200はやや外反する頸部に、僅かにつまみ出した様な立ち上がりを持つもので、立ち上がり基部内面には抉り状の凹みを持つ。頸部外面はヨコナデ、内面はミガキを施し、立ち上がり部分はナデで仕上げる。頸部形態からは1199が退化したものと想定されることから、篠原式でも中段階以降のものと考えられる。

1201は頸部と胴部の境に若干段状の屈曲を持ちながら外反し、やや丸みを帯びた突起状の立ち上がりを持つもので、立ち上がり基部外内面には1条の沈線を持つ。復元径は約32cmを計る。器面調整は外内面共に丁寧なナデで仕上げる。篠原式古段階と考えられる。

1202は外反する頸部に対し、直行から僅かに外傾する細身の立ち上がりを持つもので、立ち上がりの基部外内面には1条の沈線を持つ。また、頸部と胴部の境には段状に当たるものか、1条の沈線を持つ。復元径は約40cmを計る。調整は不明確ながら、口唇部外内面共にミガキカナデを施し、立ち上がり部分はヨコナデ調整で仕上げるものと考えられる。滋賀里Ⅲ a 式の新相であろう。

1203は頸部と胴部との屈曲部から外反する頸部に対して、直角よりもやや外傾気味に板状の立ち上がりを持つもので、立ち上がり基部外面には1条の沈線を、内面には若干の抉りを持ち、端部にはキザミを施す。復元径は約44cmを計る。外面の調整は、磨滅により不明確ながら、頸部付近に横方向のミガキを施す。内面及び立ち上がり部分はナデ調整で仕上げる。本遺物は、頸部上の板状の立ち上がりに滋賀里Ⅲ a 式の特徴が残るものの、口縁上端部のキザミは篠原式中段階頃の新しい様相を窺わせるものである。この様な特徴は、深鉢1191の口縁部にも類似しており、キザミ施文の上限をもっと古く考える事も含めて、微妙な時期の資料と考えられる。

1204は頸部と胴部との境に沈線状の凹みを持ち、外反する頸部に対して、直角よりもやや外傾する板状の立ち上がりを持つもので、立ち上がり基部内面には強い抉りを、端部には面取りを施す。復元径は約37.8cmを計る。外面調整はヨコナデ、内面はミガキを施し、立ち上がり部分はヨコナデで仕上げる。篠原式古段階と考えられる。

1205は頸部と胴部との境に段状の屈曲と強いヨコナデによる凹みを持ち、直行気味に開く頸部に対して外傾する板状の立ち上がりを持つが、基部外面の稜線が甘い。復元径は約32.3cmを計る。頸部外内面は共に横方向を基調としたナデ調整で、立ち上がり部分もヨコナデ調整で仕上げる。篠原式古段階から中段階と考えられる。

1206は屈曲する頸部に短く外傾する口縁部で、頸部に対して外傾する板状の立ち上がりを持つもので、屈曲部外面で強いナデによる凹みを持ち、立ち上がり基部内面には若干の抉りを持つ。復元径は約21.4cmを計る。胴部外内面は共に横方向を基調としたナデ及びミガキを施し、立ち上がり外面はミガキを、その他はナデで仕上げる。また、端部には面取りを施す。滋賀里Ⅱ式ないしⅢ a 式と考えられる。



1207は強く屈曲する頸部に短く外傾する口縁部で、口唇部に丸味を帯びた断面長方形の平坦な立ち上がりを持つもので、立ち上がり基部内面に若干の抉りを持つ。器面調整は外内面共に横方向のミガキを基調とし、立ち上がり部分はナデ調整で仕上げられる。滋賀里Ⅱ式と考えられる。

1208は強く屈曲する口頸部から肥厚しながら開く口縁部で、口唇部上に断面三角形の突起状の立ち上がりを持つもので、立ち上がり基部外面に1条の沈線を施す。また、口頸部外面には強いヨコナデによる沈線状の凹みを有す。復元径は約18.2cmを計る。肩部外面はミガキで、口縁部外面は横方向のミガキを施す。内面調整はヨコナデを基調とする。篠原式中段階と考えられようか。

1209は口頸部で屈曲し、短く外傾しながら立ち上がる口縁部を持つ。屈曲部外面には強いヨコナデによる沈線状の凹みを有す。復元径は約13.7cmを計る。胴部外面はナデ、内面はヨコナデで仕上げ、指頭圧痕も残る。口唇部はヨコナデ調整で仕上げ、端部は面取りを施す。滋賀里Ⅲ a 式新相のものと考えられる。

1210は口頸部に屈曲を持たずにそのまま内傾する口縁部を持つもので、端部外面よりやや下に強いヨコナデによる凹線を持つ。凹線下の胴部外面と内面は横方向のミガキを施し、口縁部外面はヨコナデで仕上げる。また、端部は面取りを施す。滋賀里Ⅲ a 式新相に当たると考えられる。

1211は大きく張り出す胴部に、やや外傾する短い口頸部を持つもので、口唇部が若干丸味を帯びた断面四角形の板状の突出部を持つ。突出部基部外内面には1条の沈線を施し、端部は面取りを施す。復元径は約41.5cmを計る。器面調整は、外内面共に横方向のミガキで仕上げる。滋賀里Ⅱ式ないしⅢ a 式である。

1212は口頸部で屈曲し、ほぼ直行気味に立ち上がる口縁部を持つもので、屈曲部外面には強いナデによる1条の凹線が走り、口唇部の端部は面取りを施す。復元径は約29.8cmを計る。外面調整はナデで、屈曲部に1条の沈線を施す。内面はヨコナデを基調とする。滋賀里Ⅱ式ないしⅢ a 式のものと考えられる。

1213は1212よりも口頸部での屈曲が小さく、やや内傾するものだが、屈曲部の凹線は緩く、外面で若干の段を有すのみである。また、口唇端部には面取りを施すが、ヨコナデにより細身に丸く納める。復元径は約24.8cmを計る。器面調整は、外内面共に横方向を基調とするナデで仕上げ、内面には僅かに指頭圧痕が残る。篠原式中段階以降のものと考えられる。

1214は口頸部で屈曲して直行気味に立ち上がる口縁部を持つもので、端部に短い山形状の突起を持つ。山形状突起部分の器壁は殆ど肥厚しないため、他の部分との差はあまりない。屈曲部外面や突起の下部内面には強いナデを施し、屈曲部外面には僅かに凹線状の凹みを1条持つ。復元径は約15.0cmを計る。器面調整は外内面共にナデで仕上げる。篠原式中段階から新段階と考えられる。

1215は肩部のみであるが注口付土器と考えられる。大きく張り出した胴部から上半部分にかけては、2条の平行沈線で区画する斜格子沈線を施す。器面調整は外内面共にナデである。滋賀里Ⅲ a 式にあたる。

1216は突出の強い凹状の底部から立ち上がり、鉢状を成す。肩部においてやや内傾気味に強く屈曲する段を持ち、内傾しながら長く伸びる口頸部を持つもので、口唇部は若干肥厚する。肩部と口頸部との屈曲部外面は、強いヨコナデにより1条の凹線を施す。復元径は約9.5cm、復元最大径は約14.0cm、底径は2.8cm、復元高は約15.8cmを計る。胴部外面は縦方向の条痕後ナデで、内面は横方向の二枚貝条痕後ナデ及びミガキで仕上げる。口頸部は横方向のナデを施し、上端部は面取りする。滋賀里Ⅲ a 式の範疇におさまるものと考えられる。

4. 縄文晩期後半の土器 (第296図)

個遺跡における縄文晩期の土器群、特に凸帯文土器については中央区、及び南区の上層において出土している。

中央区出土の土器 (1217~1218)

1217は深鉢或いは壺の肩部に当たる箇所であろうか。器形は微妙に内彎している様である。1条の低い三角形状凸帯を貼付し、その上下をナデ調整で仕上げる。また、内面調整もナデである。

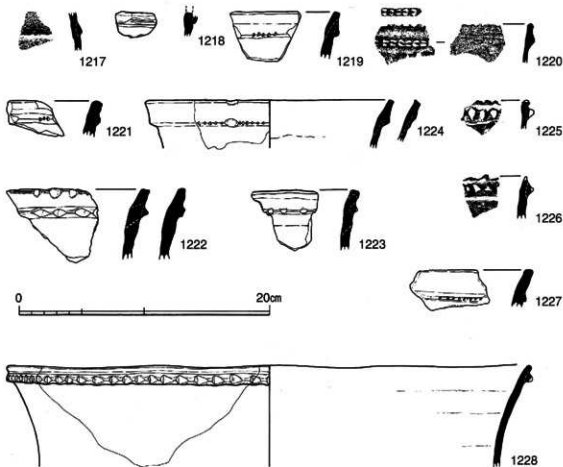
1218は小片で明確でないが、浅鉢の口縁部付近であろうか。擬口縁状の上端部の直下外面に1条の凸帯を貼付し、凸帯上に横方向の沈線を施す。凸帯の下はミガキ調整が認められる。内面は、ヨコナデ調整を施す。東日本系土器の可能性ある。

南区の出土の土器 (1219~1227)

1219~1221はS D107出土のものである。

1219は深鉢或いは壺の口縁部である。やや外反する口縁部には、外傾気味に面のある端部を有す。1条の凸帯は口縁端部よりやや下がった位置にあり、三角形がやや垂れ下がった形状を呈する。凸帯上には細かなキザミが幾分不規則で並ぶ。また、凸帯の上は指頭圧痕が残り、それ以外の外内面はナデ調整である。長原式併行のものとなろうか。

1220は深鉢の口縁部で、やや外傾気味に直口する。1条の凸帯は、口縁部よりやや下がった位置にあり、断面形状は幾分台形気味の低い三角形状を成す。凸帯上及び口縁上端部には櫛状を呈すると考えら



第296図 縄文上層出土晩期後葉凸帯文土器

れる工具の連続衝突により、平面形「コ」字状の文様を施す。凸帯部及び口縁部外面付近はナデ調整で、内面は横方向の条痕を施す。本遺物は、他の凸帯を施す土器と比して異形であり、その凸帯文の特徴から遊賀里Ⅳ式に比定される。

1221も深鉢の口縁部であろう。ほぼ直口する厚手の口縁部は端部で面を成し、丸くおさめる。1条の凸帯は、口縁端部よりもやや下側にあり、丸みを帯びた三角形状を呈する。凸帯上には、小さなキザミが不定間隔で施される。凸帯の上下及び内面は、ナデ調整である。

1222は深鉢の口縁部である。やや外反気味の口縁部に、面取りを施した口縁端部を持つ。口縁端部には、大小のキザミが施される。1条の凸帯は、口縁端部よりもやや下側にあり、比較的シャープな三角形状を呈するが、凸帯上の付される丸味を帯びた菱形で幅広のキザミに当たる部分は、断面台形状を成している。凸帯の上下及び外内面はヨコナデ調整である。遊賀里Ⅳ式ないし口酒井期のものであろう。

1223は深鉢の口縁部である。微妙に外反する口縁部に、面取りを施した口縁端部を持つ。1条の凸帯は、口縁端部よりもやや下側にあり、低い三角形状を呈する。凸帯上には小さな楕円形状のキザミが施される。口縁部の上下は、強くヨコナデを施したため、調整部分が凹線状に残る。また、その他の外内面については、ナデ調整で仕上げる。

1224は深鉢の口縁部であろう。復原径は、約19.8cmで、外反しながら立ち上がる口縁部を持ち、外傾気味に小さく面を成す口縁端部を有す。1条の凸帯は、口縁端部よりもやや下側にあるものの、端部に向けて若干肥厚するので、端部から垂れ下がった様に貼付しているとも考えられる。凸帯は、低い三角形状だが、殆ど段状を呈するものである。凸帯上には、定間隔の小さな変形状のキザミを施すが、一部棒状工具による施文らしきものがみられ、口縁端部にまで施文されている。凸帯の上下と外面はナデ調整であるが、内面は摩擦により不明である。但し、内面には粘土接合痕が認められる。長原式併行期のものか。

1225は深鉢の口縁部である。ほぼ直口気味に立ち上がる口縁部には、深くキザミを施す口縁端部を持つ。1条の凸帯は口縁端部よりもやや下側にあり、断面形が台形状を呈する。凸帯上には六角形状のキザミが定間隔に施される。凸帯の上下はヨコナデ調整で、内面はケズリを施す。遊賀里Ⅳ式のものと考えられる。

1226も深鉢の口縁部である。ほぼ直口気味に立ち上がる口縁部には、深くキザミを施す口縁端部を持つ。1条の凸帯は口縁端部よりもやや下側にあり、断面形が三角形状を呈する。凸帯上には丸味のある菱形、若しくは「D」字状のキザミが施される。凸帯の上下はヨコナデ調整で、内面は摩擦により不明である。遊賀里Ⅳ式のものと考えられる。

1227は深鉢の口縁部である。個体は小片であり、全体の形態は不明であるが、僅かに波状を呈するものと考えられる。口縁部は直口気味に立ち上がる形態を呈する。口縁端部は面取りし、やや内傾する。口縁部外面には、端部より若干下程に断面三角凸帯を貼付し、凸帯上に細い変形状のキザミを施す。器面調整は外内面共にナデで仕上げる。時期は不明ながら縄文晩期末葉になるものと考えられる。

1228は深鉢の口縁部である。復原径は、約42.0cmで、外反しながら立ち上がる口縁部を持ち、細身に丸くおさめる口縁端部を持つ。1条の凸帯は、口縁部よりもやや下側にあり、幾分丸味を帯びた三角形状を成す。凸帯上には、「D」字状で幅広のキザミがほぼ定間隔で施される。凸帯の上下と口縁部付近はヨコナデ調整で、外面は横方向のミガキ調整を施す。また、内面は、条痕の痕跡を残し、粘土接合痕も数カ所認められる。遊賀里Ⅳ式のもので良いであろう。

## 5. 縄文上層の土器・土製品・石製品 (第297・298図) (深井)

D12は断面形は1.50×1.45cmで2ヶ所の平坦部と1ヶ所の凹みがあり、平面的には長さ5.0cmをはかる棒状の土製品である。両端は欠損しており、下方が僅かにすぼまる。形態は棒状粘土を右方向に巻いた土製品あるいは粘土塊であり、表面には右上がりの凹みが入る。この凹みは螺旋状に続くものの、半周程度で終わる。また部分的に右上がりのヘラによる押さえがある。土偶の脚部と似ているが、粘土を巻きながら作る技法は当遺跡出土の土偶の製作技法とは異なる。胎土1.0mm程度の石英を含む。色調はA面で7.5Y5/1楊灰色を呈し、B・C面は7.5YR7/6橙色を呈する。焼成はやや不良で軟質である。出土位置は北区N15区で、出土層位は縄文シルト層である。出土層位からすると縄文晩期遊賀里Ⅲa式期以降の所産と考えられる。

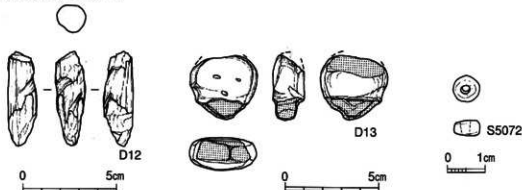
D13は中型の人形土偶の頭部であり、全長3.5cm、最大幅3.6cm、最大厚1.7cm、をはかる。後頭部の上方の一部が欠損し、胴部との接合はソケット状を呈し、剥がれ痕跡が残るものである。頭部は前後扁平であるため、扁平な形状をみせる。文様は頭部正面に兩目と口が棒状工具による僅かな突起がある。単純な描きかたであり、素朴な表情をみせている。出土層位が弥生包含層であるが、頸部と胴部との接合がソケット状であること、晩期中葉の遺構面の存在などから考え、時期については、縄文晩期遊賀里Ⅲa式～篠原式のものと考えられる。

S5072は滑石製の小玉である。直径7mm、長さ4mmで円柱状を呈する。表面は全体的に研磨され、特に角はやや丸みをもって研磨が施されている。穿孔径は上面2.7mm、下面は2.0mmと直線的であり、上面から一方の穿孔と考えられる。この遺物は北区J15-25区に設けられた50cm四角の水洗選別土壌資料から発見されたものである。この玉は晩期の土器棺や土壘墓が密集した箇所付近に近接していることから、被葬者の装身具の一部であった可能性が高い。

## 孔列土器 (1393)

(岡田)

1393は口径11.3cmに復元され、壺形を呈する土器である。器表面は摩滅が著しく全体の調整は定かでないが、頸部にのみ僅かに横ナデを認めることができる。緩く外反する頸部には、約1.3cmの間隔をとって2つの焼成前穿孔が認められ、同じ距離をとる破片右端にも、僅かに孔の痕跡らしきものが観察されることから、孔が全周していたものと推定される。穿孔は外面より内へ向かって行なわれたものと考えられ、孔径は外面において0.25cmを計り、内面は0.18cmと小さい。これらの特徴は、朝鮮半島の前期無文土器に通じる部分があり、片岡宏二氏の「孔列土器5類」に相当する可能性が指摘できるものの、他に掲げられている例より孔径が細い上、腹部の張り具合が異なる(片岡1998)。南区K21区のサブレンチより出土したもので、同層位には縄文晩期および弥生土器が包含されており、具体的な伴出関係はおさえられない。



第298図 縄文上層出土土製品 (D12、D13)、石製品 (S5072)

## 第4節 石器

(山本)

## 1. 北区・中央区の石器 (第299~313図)

ここでは、打製石器154点、磨製石器38点が出土した。打製石器の66% (101点) が楔形石器である。続いて石鏃10% (16) 点となる。

楔形石器のうち、A類は26% (26点)、B類は71% (72点) で、A類とB類は1対3の割合となっている。B類の中でも、B1型が37%、B2P型が22%と楔形石器全体の約6割を占めることがわかる。

石鏃は16点出しているが、A類 (31%)・B類 (44%) で石鏃の75%を占める。北中央区では、下層・中層に比べB類の割合が高いことが指摘できる。

この層では、サヌカイトの分割原石が12点出している。このうち9点 (S5052~S5060、第8-31~36図) はI12区の土坑 (SK202) から一括で出土したものである。いずれも大形の原石から剥離して板状の素材剥片となったもので、長さ15~20cm、厚さ2~6cm、重さ300~1300gである。これらの接合作業を試みたが、全く接合関係をもたないことが判明した。よって、遺跡内で剥離作業が行われたことも考えられるが、むしろサヌカイト原産地周辺にて剥離作業が行われたことも十分に予測され、交易などにより、この個遺跡にもたらされた可能性が指摘できる。残りの分割原石は淡路島内産の円礫を分割したものである。いずれも分割面中央部にリング・フィッシャーの起点が存在し、熱破砕による分割礫であると考えられる。

## 2. 南区の石器 (第314~321図)

打製石器175点、磨製石器18点出土した。

ここでも楔形石器が打製石器の66% (115点) で、磨製石器を合わせても石器の半数以上を占める。楔形石器の類型別では、A類が13% (15点)、B類が83.6% (96点) で、B類が圧倒的に多い。また北区・中央区同様、B類でもB1類・B2P類が62%を占める。

石鏃は39点出土し、打製石器の22%を占めている。各類型別ではA類31%、B類33%、C類23%とな

第40表 北区・中央区上層石器組成表

打製	点数	%	磨製	点数	%
AH	16	10.4	AX	1	2.6
DR	2	1.3	SS	0	
SC'	4	2.6	HS	1	2.6
SC	8	5.2	SD	11	28.9
RF	1	0.6	SH	17	44.7
UF	4	2.6	SP	1	2.6
PS	101	65.6	SW	6	15.8
CR	5	3.2	その他	1	2.6
DM	12	7.8			
PO	1	0.6			
小計	154	-	小計	38	-

第41表 南区上層石器組成表

打製	点数	%	磨製	点数	%
AH	16	10.4	AX	1	2.6
DR	2	1.3	SS	0	
SC'	4	2.6	HS	1	2.6
SC	8	5.2	SD	11	28.9
RF	1	0.6	SH	17	44.7
UF	4	2.6	SP	1	2.6
PS	101	65.6	SW	6	15.8
CR	5	3.2	その他	1	2.6
DM	12	7.8			
PO	1	0.6			
小計	154	-	小計	38	-

第4節 石器

第42表 北・中央区縄文上層石器種類分類表

	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%		点数	%
A1	2	12.5	B1	2	12.5	C1	1	6.3	D1			E1		
A2	2	12.5	B2	1	6.3	C2	1	6.3	D2	1	6.3	E2		
A3			B3	2	12.5	C3			D3	1	6.3	E3		
A4			B4	1	6.3	C4			D4			E4		
A5	1	6.3	B5	1	6.3	C5			D5			E5		
A計	5	31.3	B計	7	43.9	C計	2	12.6	D計	2	12.6	E計		

第43表 北・中央区縄文上層楔形石器分類表

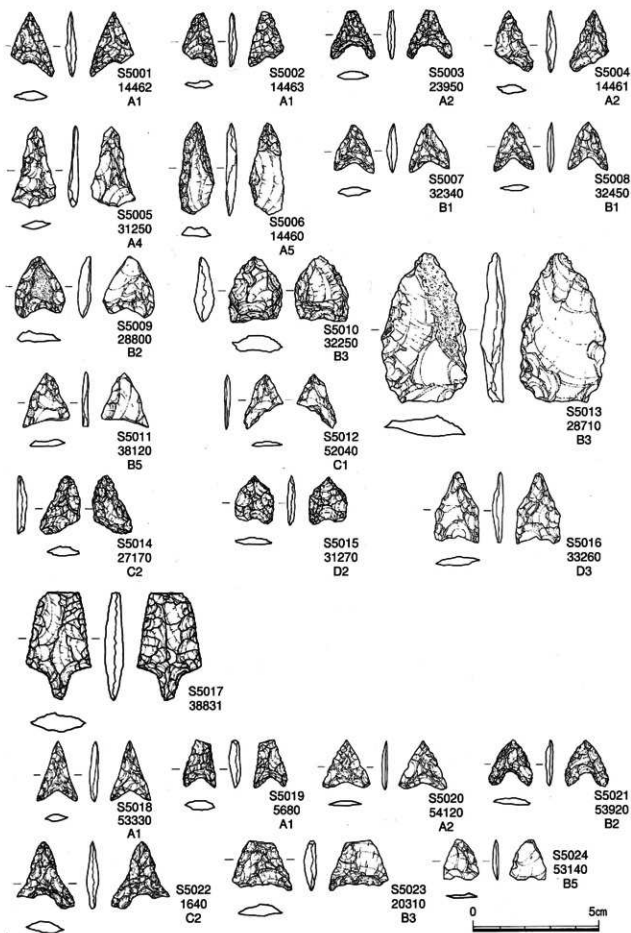
	点数	%		点数	%		点数	%
A1	1	1.0	B1	37	36.6	S1	2	2.0
A2	6	5.9	B2P	23	22.8	S2	1	1.0
A3	4	4.0	B2L	6	5.9			
A4	15	14.9	B2V	5	5.0			
			B3	1	1.0			
			B4					
			B?					
A計	26	25.8	B計	72	71.3	S計	3	3.0

第44表 南区縄文上層石器種類分類表

	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%		点数	%
A1	3	7.7	B1	1	2.6	C1	1	2.6	D1	1	2.6	E1		
A2	3	7.7	B2	4	10.3	C2	6	15.4	D2	2	5.1	E2		
A3	3	7.7	B3	8	20.5	C3	2	5.1	D3			E3		
A4	2	5.1	B4			C4			D4			E4		
A5	1	2.6	B5			C5			D5			E5	2	5.1
A計	12	30.8	B計	13	33.4	C計	2	23.1	D計	3	7.7	E計	2	5.1

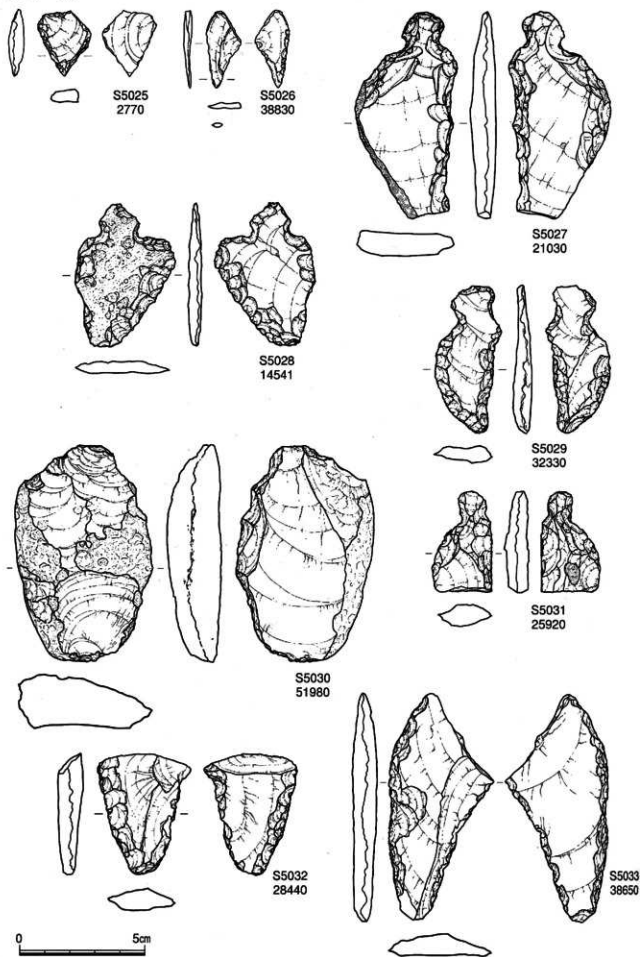
第45表 南区縄文上層楔形石器分類表

	点数	%		点数	%		点数	%
A1	2	1.7	B1	40	34.8	S1	3	2.6
A2	3	2.6	B2P	31	27.0	S2	1	0.9
A3	2	1.7	B2L	7	6.1			
A4	8	7.0	B2V	14	12.2			
			B3	4	3.5			
			B4					
			B?					
A計	15	13.0	B計	96	83.6	S計	4	3.5



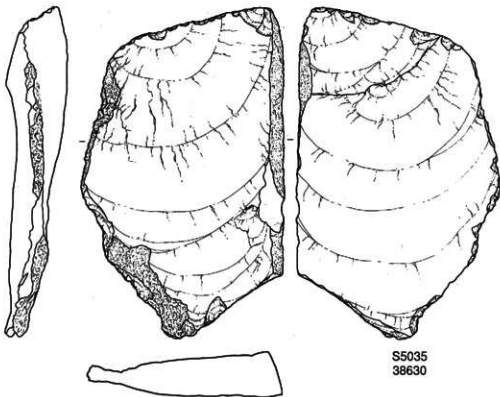
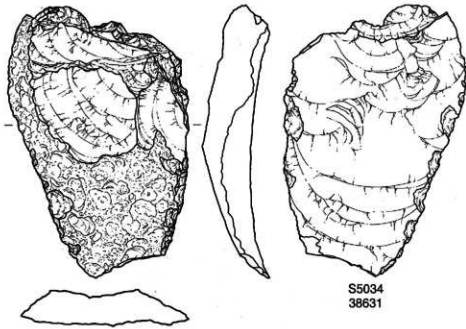
第299図 北・中央区縄文上層出土石鏃・尖頭器

第4節 石器



第300回 北・中央区縄文上層出土石錐・石匙・削器

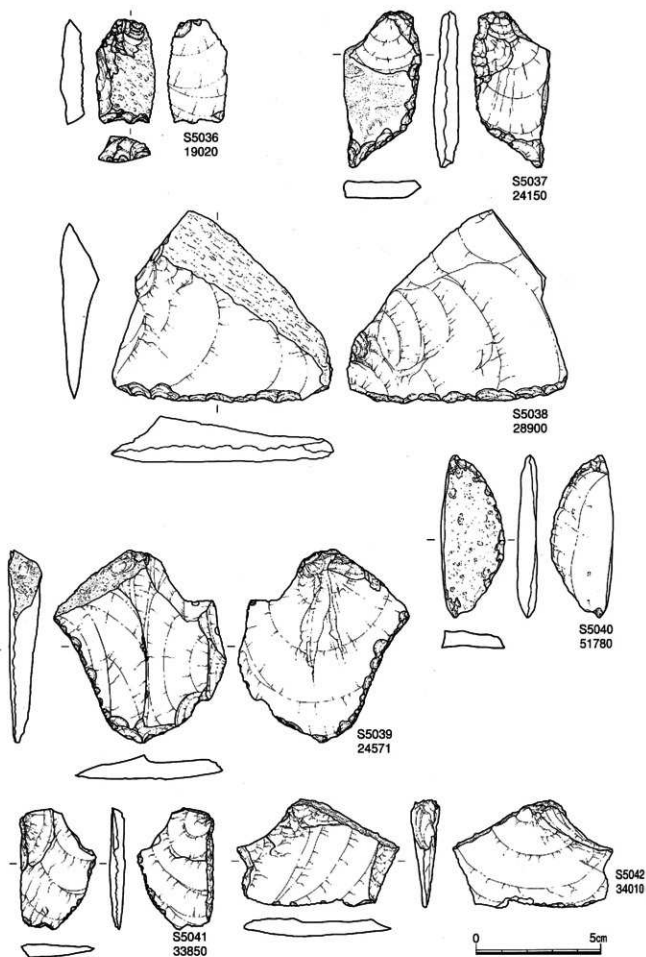




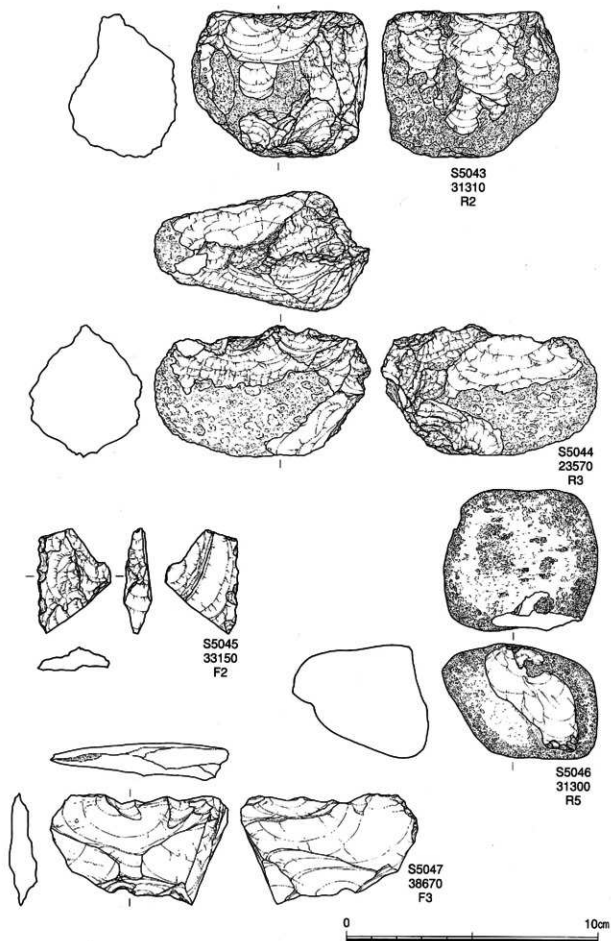
0 5cm

第301図 北・中央区縄文上層出土石器-2

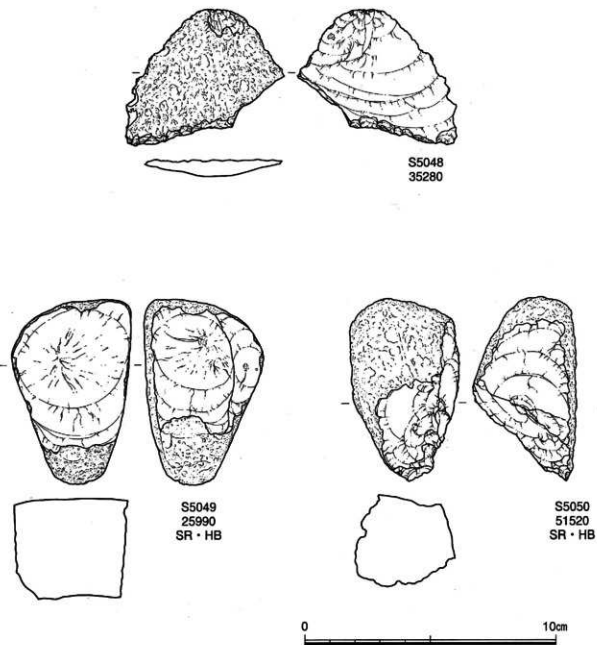
第4節 石器



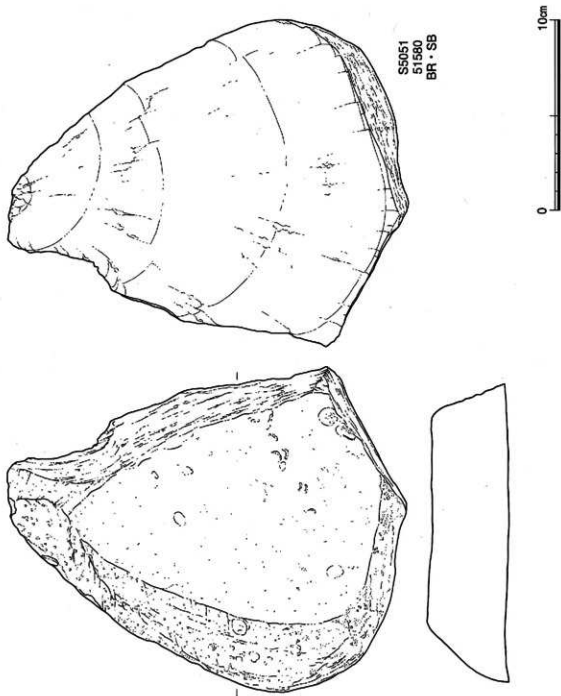
第302図 北・中央区縄文上層出土石器-3・使用痕のある剥片・加工痕のある剥片



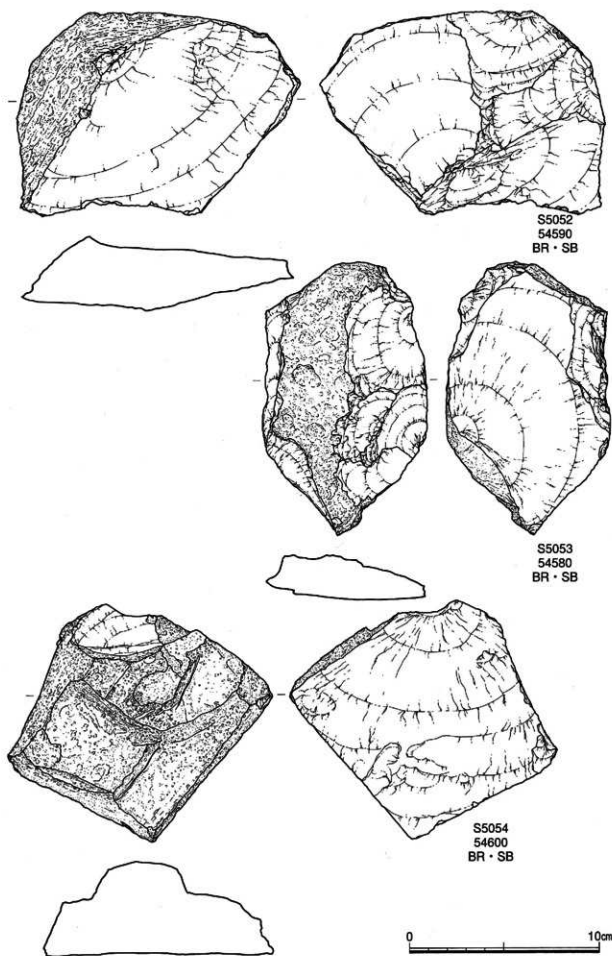
第303図 北・中央区縄文上層出土石核



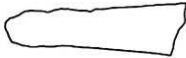
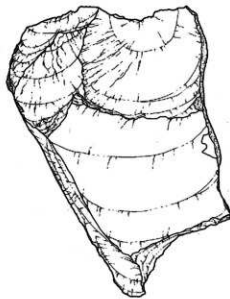
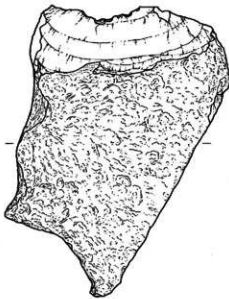
第304図 北・中央区縄文上層出土使用痕のある剥片・分割原石



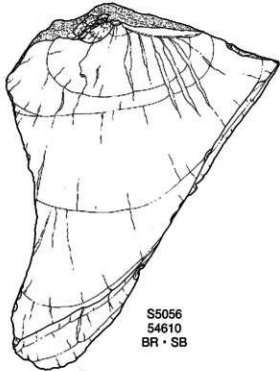
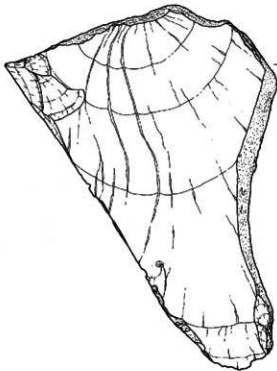
第305図 北・中央区縄文上層分割原石-1



第306図 北・中央区縄文上層出土分割原石-2



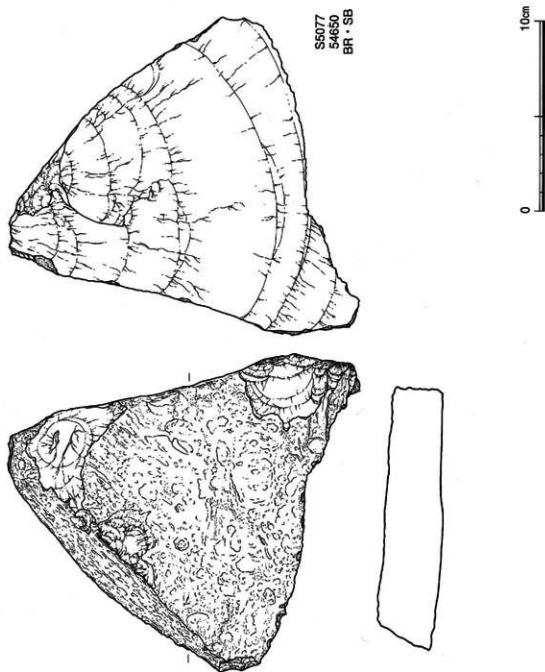
S5055  
54640  
BR・SB



S5056  
54610  
BR・SB

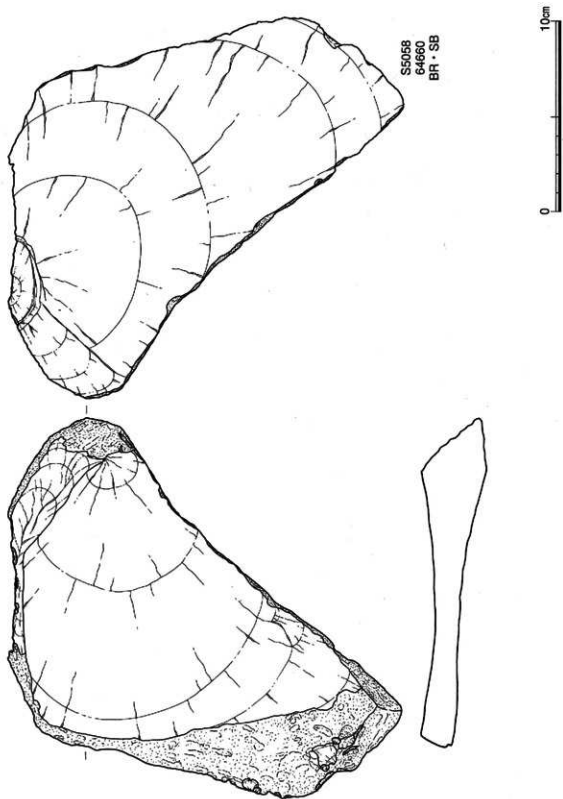


第307図 北・中央区縄文上層出土分割原石-3

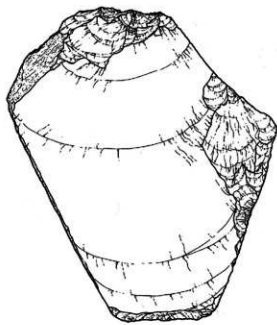
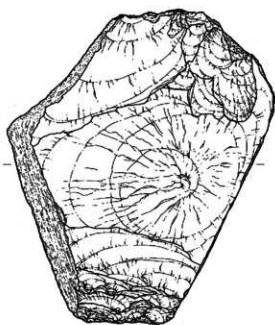


第308図 北・中央区縄文上層分割原石-4

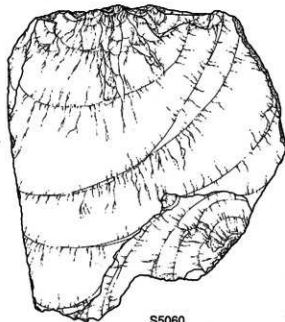
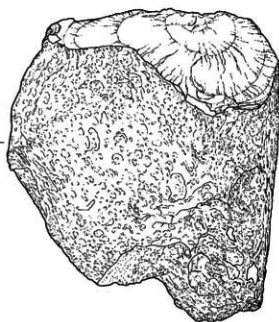




第309図 北・中央区縄文上層出土分割原石-5



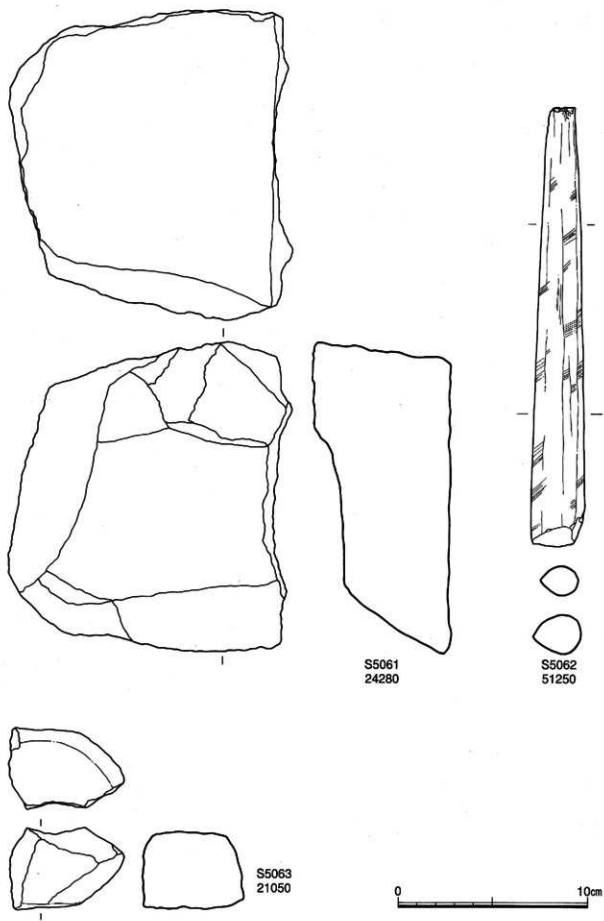
S5059  
54630  
BR・SB



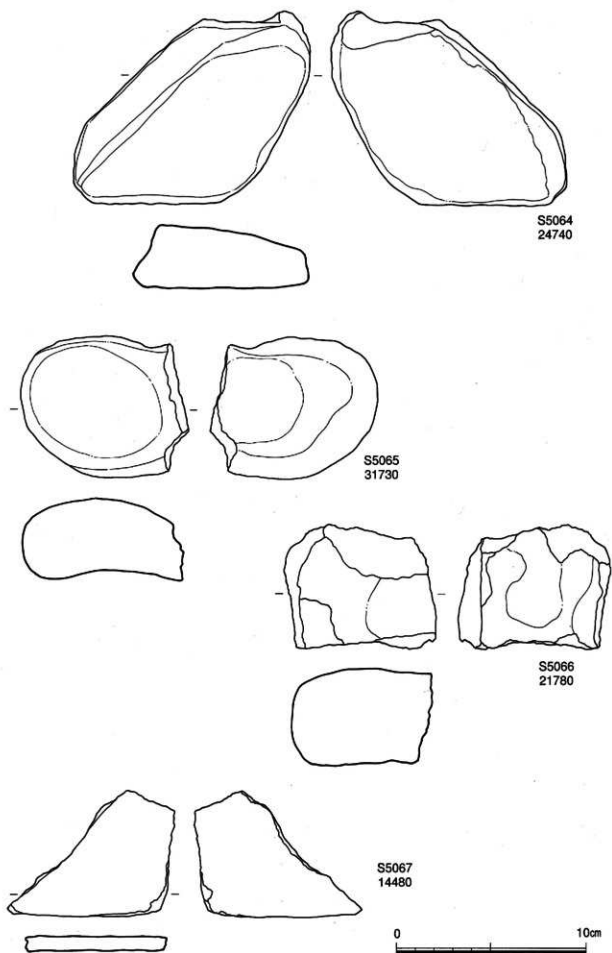
S5060  
54620  
BR・SB



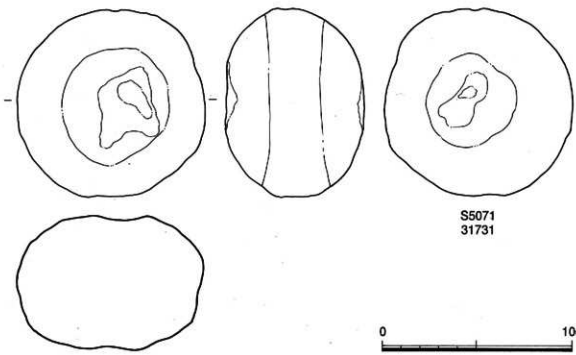
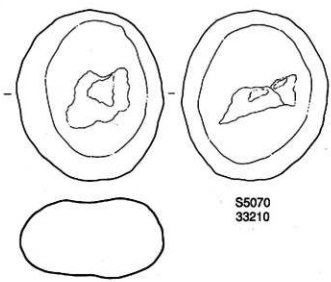
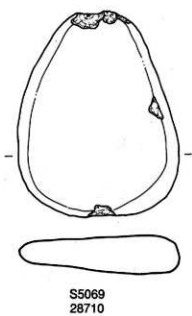
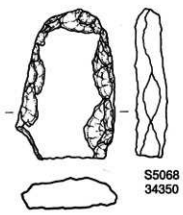
第310図 北・中央区縄文上層出土分制原石-6



第311図 北・中央区縄文上層出土石皿・石刀

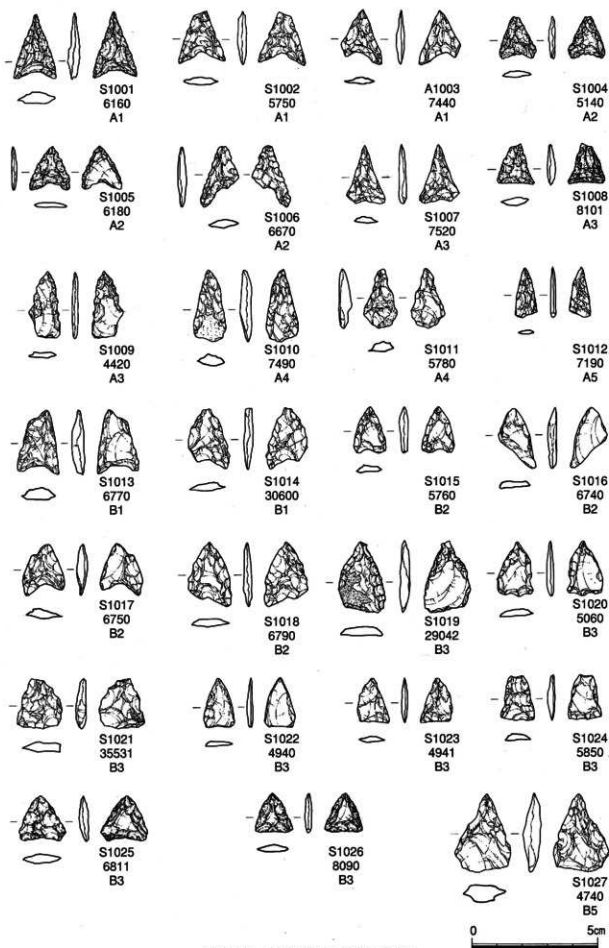


第312図 北・中央区縄文上層出土石器

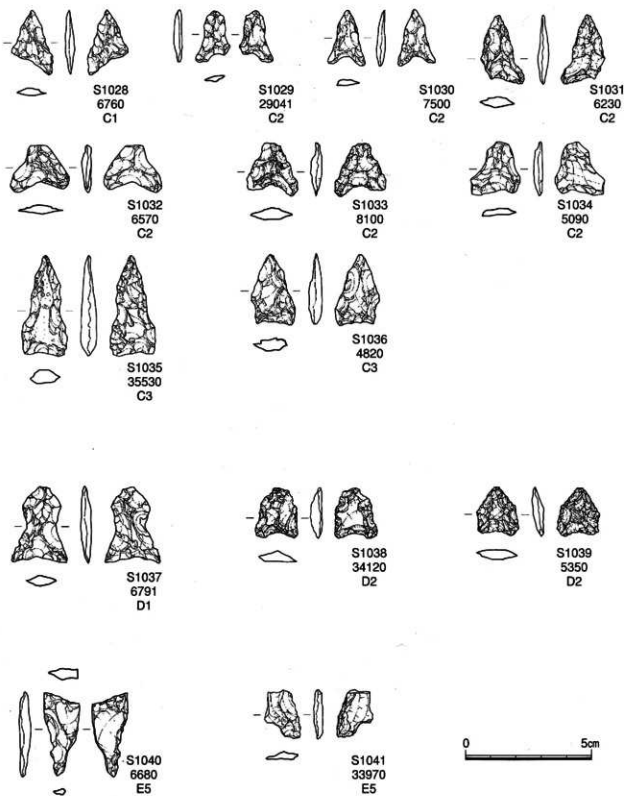


第313図 北・中央区縄文上層出土石斧・石錘・凹石

第4節 石器

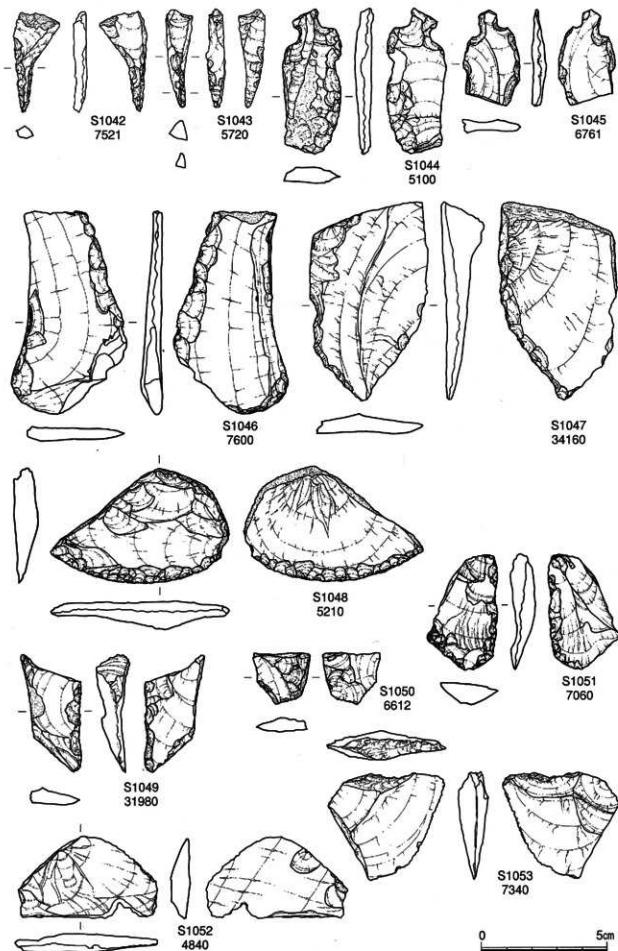


第314図 南区縄文上層(6期)石器-1



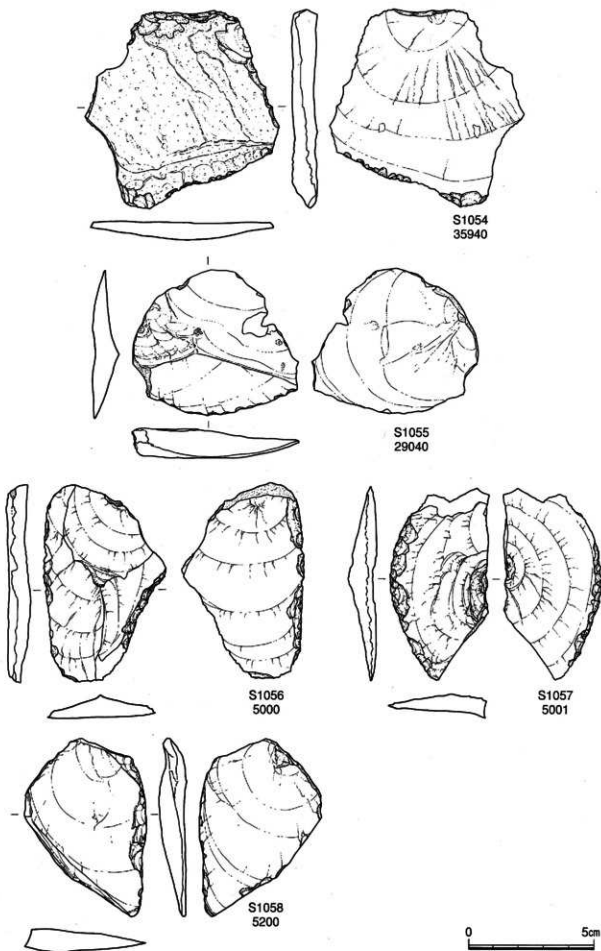
第315図 南区縄文上層 (6期) 石鏃-2

第4節 石器

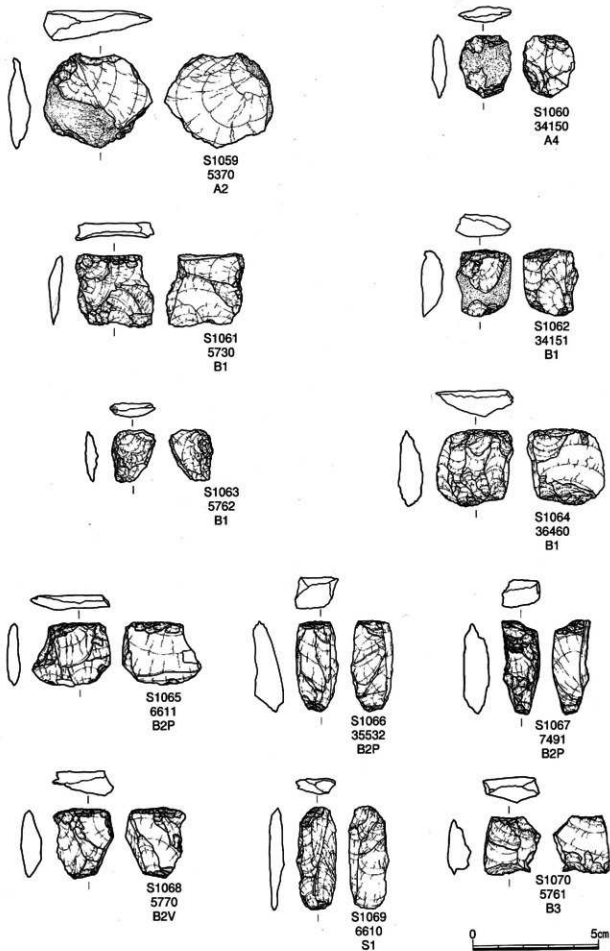


第316回 南区縄文上層（6期）石錐・石匙・削器・加工痕のある剥片・使用痕のある剥片

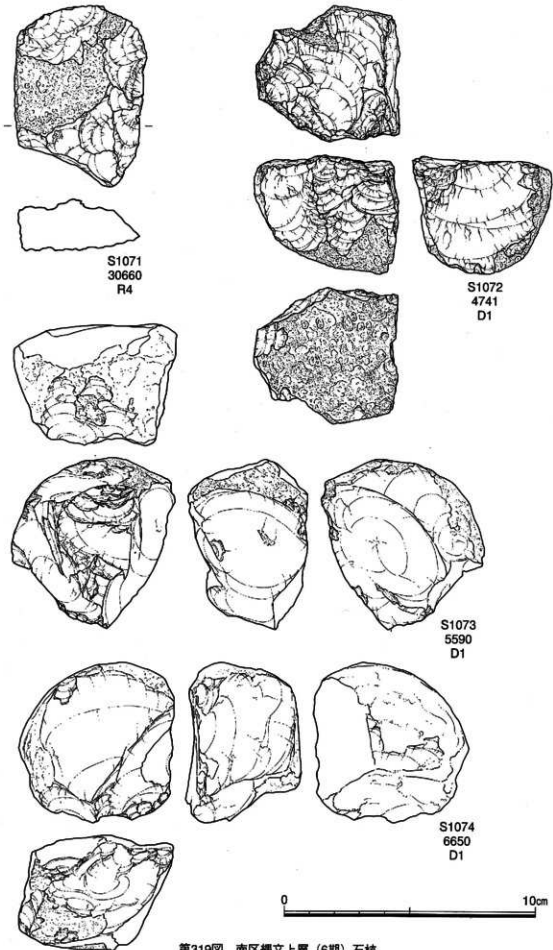




第317図 南区縄文上層(6期)使用痕のある剥片

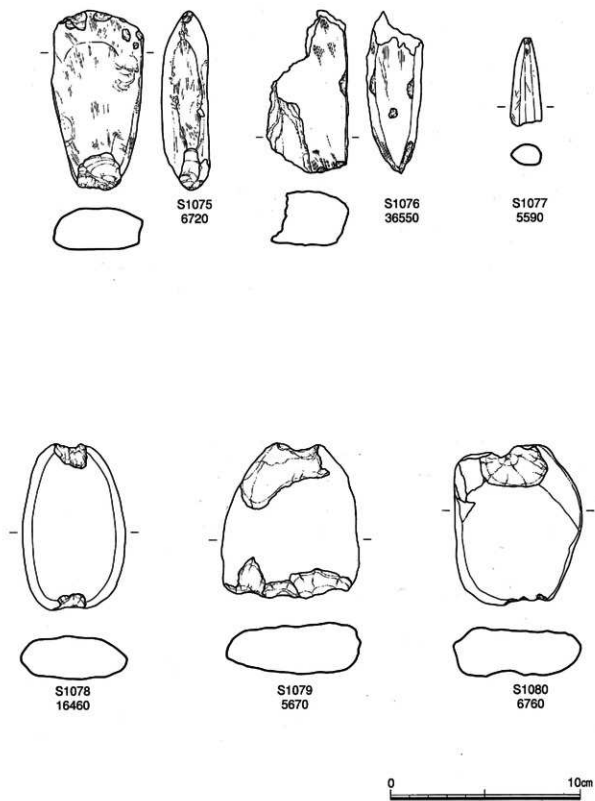


第318図 南区縄文上層(6期)楔形石器

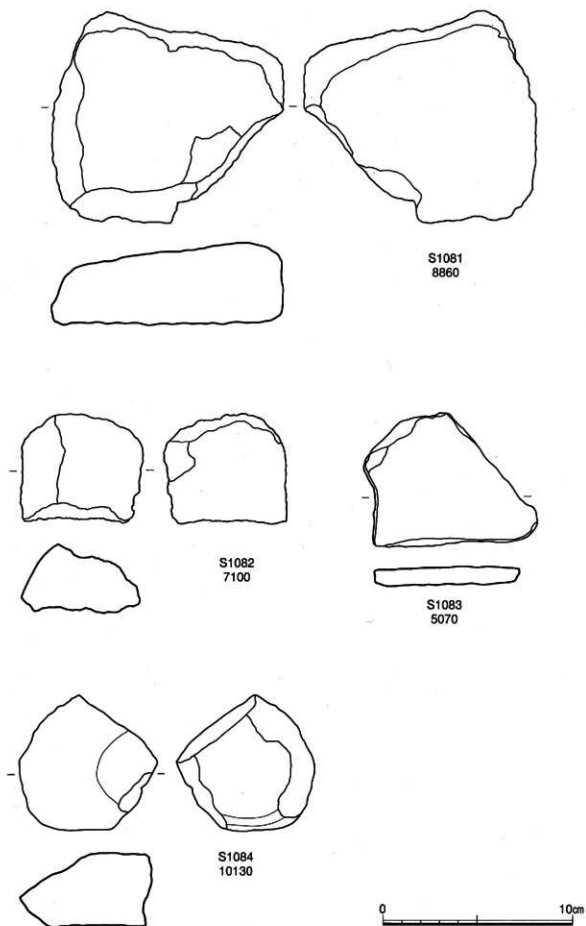


第319図 南区縄文上層(6期)石核

第4節 石器



第320図 南区縄文上層(6期)石斧・石剣・石錘



第321図 南区縄文上層(6期)石皿

#### 第4節 石器

り、この3者で大多数を占めるが、これまでの時期にはあまり存在しなかったD類が、一定量存在することは注目できる。

石核は4点の出土であるが、そのうち3点が円盤のを分割原石を用い、打面と作業面を固定して剥片の剝離をおこなう「D1型」である。

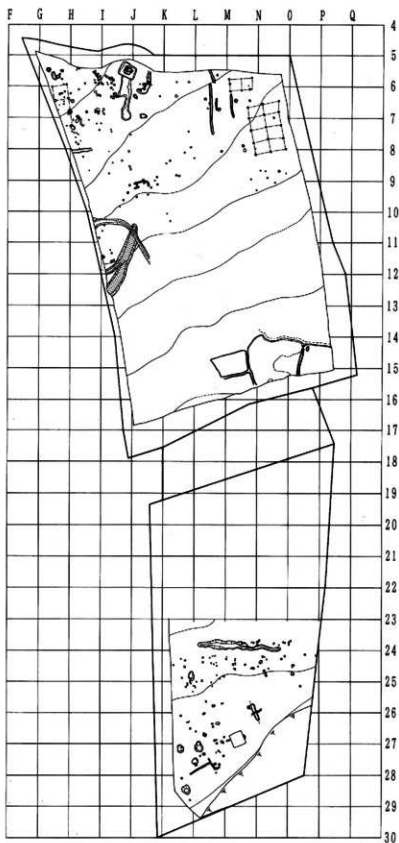
## 第9章 弥生時代～奈良時代の遺構・遺物

## 第1節 遺構 (山本)

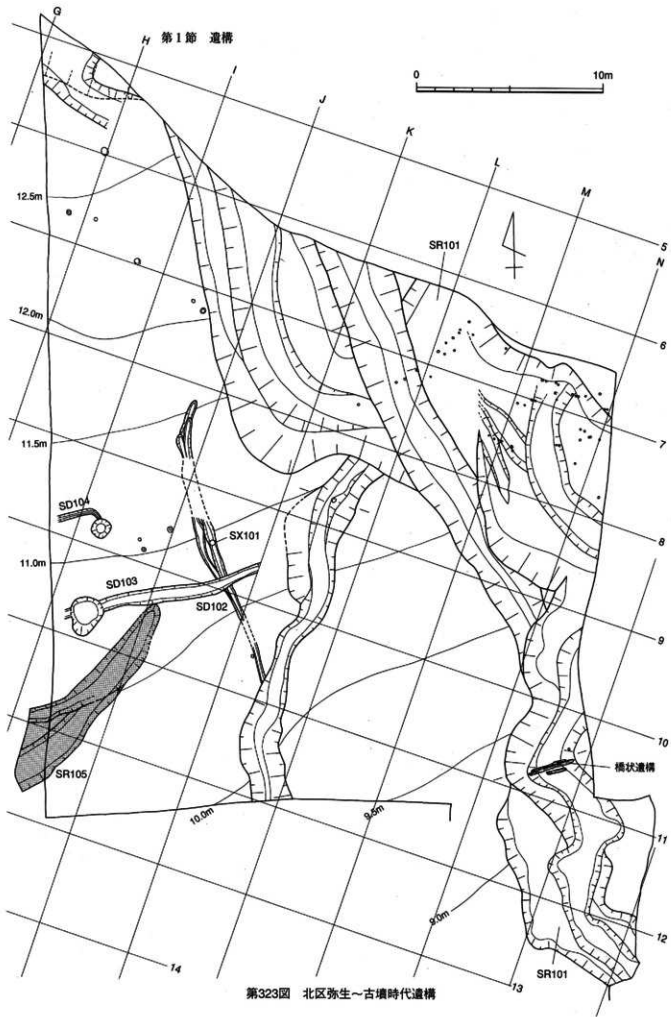
この時期の遺構は、北区・中央区・南区のほぼ全域で認められた。遺構は溝や流路を主体に検出され、出土遺物等の検討を行っているが各時期にわたっていることが判明した。自然流路の他、溝6条、土坑1基、及び土器棺1基である(第322図)。

弥生時代と考えられる遺構としては流路(S R 101)、溝(S D 101・102・106・107)、土器棺(S X 101)がある。

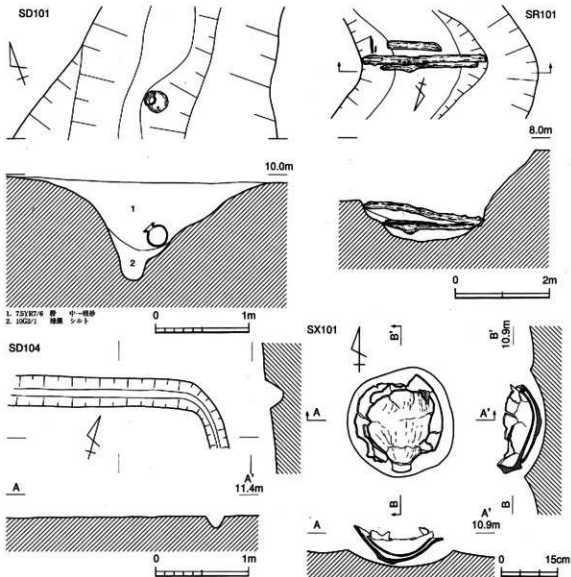
流路S R 101は北区の北東隅で検出され、北西から南東に向けて流れる自然流路である(第9-2図)。流路からは、弥生土器の他、奈良時代の須恵器などが出土した。またこの流路は、S D 101を切っていることから、弥生時代後期以降～奈良時代にかけて、幾度となく流れを変化させていた流路であることが分かった。この流路の中でもおおよそ弥生時代の流れと考えられるのは西端の流れである。またこの流路中央の下面からは北東から南西方向の杭列やM7区を中心とした付



第322図 弥生～古墳時代遺構配置図







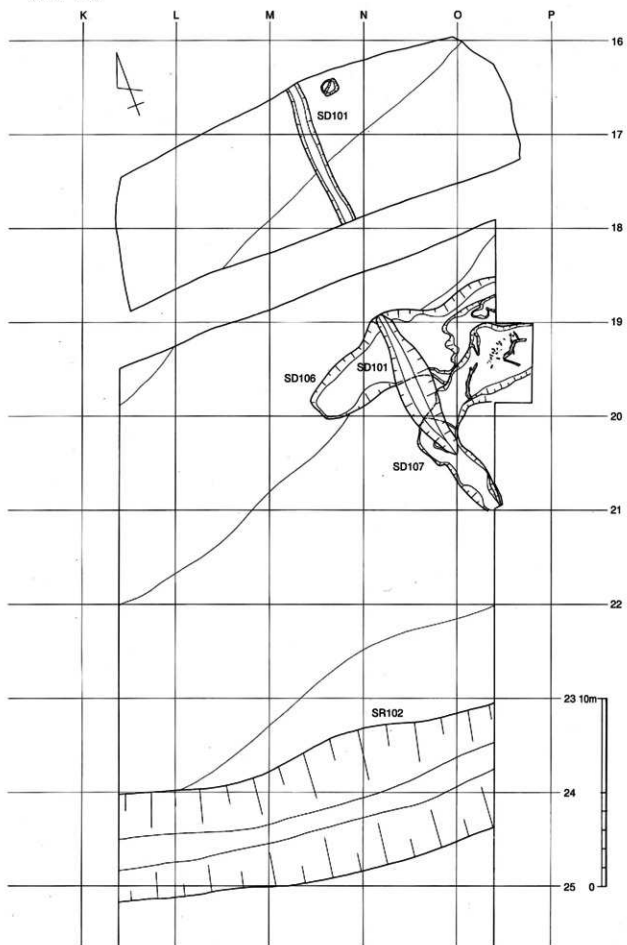
第324図 弥生～古墳時代各遺構 (SD101、SD104、SR101、SX101)

近からも杭が検出された。この流路の流れを堰き止めて水位を上げて利用する井堰の可能性が高い。なおこの流路のN10区では流れの直方向に樹皮を残した木材3本が横たえられた状態で検出された(第93図)。東肩部ではほぼ上端にかかる状態であることから、橋状遺構の可能性もある。

南区では東西方向に流れる自然流路SR102がある(第325図)。これは平面的に検出されたものではなく、南区断面で判明したものである。土層の切り合い関係や出土遺物から縄文晩期より新しく中世より古いこと、細片ではあるが、出土遺物等から弥生時代と判断した。この流路は縄文時代後期の扇状地末端の地形の残映と考えられる。

南北にのびるSD101は、北区から中央区・南区まで延びる直線的な遺構で、幅は1～3mで、深さは1m、長さ65mをはかる(第323・325図)。北区K8区から検出されたが、SR101により切られている。残存状態の良い北区では断面形は底がやや丸くなった緩やかなV字形をなしている。溝の下層には緑黒色のシルトが堆積し、上層には橙色の中～粗砂が堆積している。この上層下面にて完形の壺形土器が出土した(第93図)。胴部上半に穿孔があり、本来の貯蔵目的は失われていることから墓や祭祀的なものとして利用されたのかもしれない。この土器は弥生時代後期末のものと考えられる。中央区ではほぼ

第1節 遺構



第325図 中央区・南区弥生～古墳時代遺構

直線的に検出され、幅80cm、深さ30cmをはかる。

SD102は、北地区北1区の西よりで検出され、北西から南東にかけて、長さ15m、幅40cm、深さ15cmを計る小規模な溝である(第9-2図)。北西方向では流れを東よりに堀替えられた痕跡が検出された。なおJ9区では溝が埋まってから土器棺(SX101)がつくられている。土器の時期が弥生後期後半ごろと考えられることやSD101に切られていることから弥生後期後半頃と考えられる。

南区の北東部ではSD106・107が検出された。この付近ではSD101の最南端とも切り合っている。

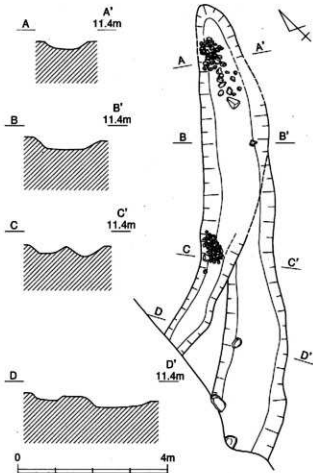
SD106は東西方向で検出され、長さ12m、最大幅2m、深さ0.2mをはかる(第9-4図)。深さが浅く遺構の肩部も不定形であることから自然流路的なものかも知れない。なおこの溝からは縄文晩期末頃の凸帯文土器や弥生前期・中期初頭の土器が出土した。

SD107はSD106のすぐ南にあり、SD106と並行する形の東西方向とN20区で屈曲し南に伸びる(第9-6図)。東西溝は最大幅2m、これに対して南に伸びる溝は幅1.8mをはかる。東端のO19区からは溝方向に斜行する杭列や木材が出土した。杭は北東側に彫らんでいるが、先端は南東方向に向いている。この杭の両側には並行して木材が横たわっている。この木材は杭を保護するものなのかは不明であるが、杭も含めて小規模な井堰の可能性もある。またこの溝からはSD106と同時期の縄文晩期末頃の凸帯文土器および弥生前期・中期初頭の土器が出土した。なお南方方向に伸びる溝からは弥生後期末頃の土器が出土していることから、SD101に関する遺物かも知れない。

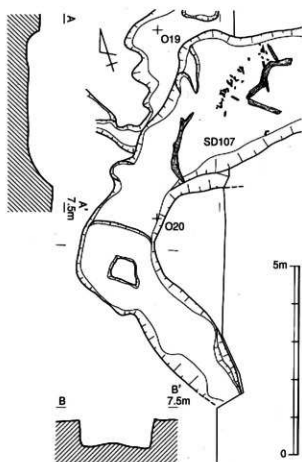
J9区では、土器棺墓1基(SX101)をSD102の埋土上で検出した(第324図)。墓壇は、直径約30cmを計る円形を呈する。検出面から床面までの深さは5cmと非常に浅いが、削平等により上面が失われているものであり、本来はさらに数10cm上方から掘り込まれていたものと考えられる。土器棺の検出状況からは、墓壇の床面上に鉢形土器を埋設し、その上に直交する形で甕形土器を横倒して据えた様に見て取れる。甕及び鉢は上面に当たる部分がそれぞれ削平を受けているため欠損しており、土器棺墓全体の復元は困難であるが、棺身となる甕形土器を埋置する時に、その固定用に鉢形土器を使用したものと考えられる。

古墳時代と考えられる遺構としては流路(SR101)、溝(SD103・104)がある。

流路SR101では前述のとおり、弥生～奈良時代の遺物等が出土しており、古墳時代においても北区



第326図 弥生～古墳時代溝(SD105)



第327図 弥生～古墳時代溝 (SD107)

北東側の一部で遺物が出土したことから、この付近を流れていたと考えられる。

SD103は、北区西寄りで検出され、東西にかけて、長さ11m、幅80cm、深さ30cmをはかる溝である(第323図)。SD102を切っていることや、僅かな出土遺物から古墳時代と考えられる。

SD104は、北区西端で検出され、I9区にて直角方向に南に屈曲する(第323図)。東西方向に2.0m、南北方向に0.5m、幅30cm、深さ15cmをはかる小規模なものである。規模などから古墳時代の方形竪穴住居跡が削平されたものと考えられるが、主柱穴らしきものもなく、住居跡を確定づけるものは検出できなかった。

奈良時代と考えられる遺構としては流路(SR101)、溝(SD105)がある。

流路SR101では北西から南東方向に伸びる流路や南東隅付近の流れがこの時期と考えられる。これらの流れから弥生～奈良時代の遺物等が出土しているが、土馬1280が流路南

東隅から出土した。

SD105は、北区西寄りで検出され、北東から南西にかけて、長さ13m、幅1.6m、深さ30cmをはかる溝である(第326図)。南西隅では流れを北方向に変えている。この溝からは多数の製塩土器が出土しており、奈良時代の遺構については他では検出されていないことから、この時期は生産関係の場として活用されたものと考えられる。

## 第2節 土器

(深江)

### 1. S D107出土土器

南区北東隅で検出したS D107は、縄文遺構内埋土に酷似する黒色層が堆積するが、遺構内より出土する土器は、縄文晩期から弥生時代前期及び中期と非常に時期的なばらつきがある。しかし、弥生土器の出土量から見て単なる混入とは考えがたい。従って、S D107は弥生時代中期の溝と考えられる。

#### 縄文時代の土器

1229から1231は深鉢の口縁部である。1229は、やや外反しながら直口気味に立ち上がり、端部で面取りを施す。端部外面よりやや下程には下垂気味の丸味を帯びた三角凸帯を貼付し、爪形キザミを施す。器面調整は磨滅により明確でないが、口縁端部及び凸帯付近は横方向のナデで仕上げる。1230はほぼ直口気味に立ち上がるもので、端部は丸く納める。端部外面よりやや下程には、端部に僅かに接する形で下垂気味の低く丸味を帯びた三角凸帯を貼付し、菱形のキザミを施す。器面調整は、全体に磨滅のため不明である。1231は僅かに外反しながら立ち上がるもので、端部は面取りしたものが上部で面を持つ。端部外面には、端部に接する形で下垂する低い三角凸帯を貼付しているが、殆ど段状をなすものである。凸帯頂部には菱形のキザミを施す。内面調整は磨滅により不明である。外面は凸帯以下に横方向の条痕を施し、凸帯から端部までは指押さえの痕跡が残る。

これらは縄文時代晩期後半の口酒井期～長原式併行期の所産と考えられる。

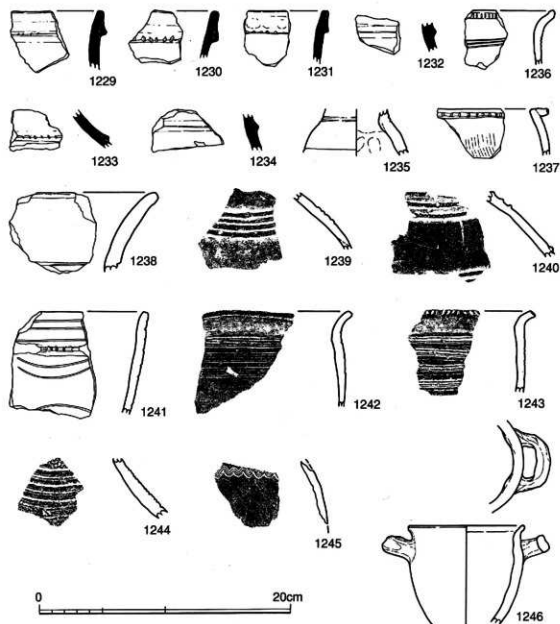
#### 弥生時代の土器

1232～1234は2条凸帯を持つ深鉢の口頸部付近に当たる。1232は外反しながら立ち上がり、外面に丸味を帯びた三角凸帯を貼付する。器面調整は外内面共に磨滅により不明である。1233は強く内傾するもので、外面にはやや下垂する低い三角凸帯を貼付し、凸帯上にD字形のキザミを施す。器面調整は、外内面共にあまり明確でないが、横方向のナデと考えられる。1234は外反気味に立ち上がり、外面に三角凸帯を貼付する。外内面調整は不明である。

1235は、口頸部付近のみで器形が明確でないが、恐らく小型の壺と考えられる。口頸部ではやや強く窄まり、直口気味に立ち上がる口縁部を持つもので、厚みがありぼてりとした器形である。張り出した肩部外面には1条の、及び口頸部外面に2条のヘラガキ平行沈線を施す。口頸部内面には、粘土接合痕が残り、若干の段を成す。肩部内面には手捏ね時の指頭圧痕が残る。器形や調整の特徴から弥生時代前期の資料と考えられる。

1236、1237は壺の口縁部である。1236は、直口気味に立ち上がる口頸部から強く外反する口縁部を持つ。口縁端部はややつまみ出して丸く納め、端部外面にはキザミを施す。また、口頸部には3条のヘラガキ沈線を施す。器面調整は外内面共にナデで仕上げる。弥生時代前期のものである。1237は内彎気味の胴部に横に大きく張り出す板状の凸帯を貼付する、所謂逆L字状を呈するものである。口縁上端部はナデにより平坦面を持ち、下側には粘土接合面で抉れを持つ。また、端部にはO字形のキザミを施す。胴部外面はケテハケの後強いヨコナデで仕上げ、胴部内面はナデで僅かに指頭圧痕を残す。口縁部はヨコナデで仕上げる。弥生時代前期末、若しくは中期初願のものである。

1238は壺の口縁部である。口頸部から大きく外反する厚手の口唇部で、口頸部付近で1条の沈線状の凹みを有する事で段を成す。器面調整は全体に磨滅により不明ながら、横方向の調整を窺わせる。弥生時代前期中段階のものであろう。



第328図 SD107出土縄文時代晩期後葉～弥生中期初頭土器

1239は壺の肩部に当たるものである。器面調整は、外内面共に横方向のヘラミガキで仕上げ、張り出す胴部上側から肩部にかけて幅広の削り出し凸帯に3条の沈線を施す。弥生時代前期の中段階である。

1240は壺の胴上半部から肩部に当たるものである。器面調整は、外面については斜方向を基調とした板ナデで仕上げる。また、張り出した胴部上には1条、口縁部に近い肩部には3条の貼り付け凸帯を貼付し、細いD字形のキザミを施す。凸帯付近は、貼付後ヨコナデで仕上げる。弥生時代前期でも新段階のものである。

1241は鉢の胴上半部である。直口気味に若干開きながら立ち上がるもので、口縁端部は丸く納める。器面調整は、外面はヘラミガキ或いはナデ、内面は横方向のヘラミガキで仕上げる。外面には、胴部を下向きに1条、上向きに2条のヘラガキ弧状沈線を、口縁部にかけて4条のヘラガキ平行沈線を施す。上から3条目の平行沈線と弧状沈線との間には、高く丸味を帯びた三角凸帯を貼付し、ヨコナデで仕上

ける。凸帯上には菱形のキザミを施す。弥生時代前期の新段階に位置づけられよう。

1242・1243は壺の口縁部である。1242は傘まりの緩い口頸部から強く外反する口唇部を持つ。口縁端部は面取りを施す。外面には斜め方向のハケメで仕上げ、口頸部にかけて太い沈線状の凹みを持つ、平行クシ描き直線文を施す。内面はナデ調整を施す。1243も傘まりの緩い口頸部から強く外反する口唇部を持つ。口縁端部は面取りをし、左右の傾きの異なる菱形のキザミを施す。器面調整は、外内面共にナデで仕上げ、外面には口頸部にかけてクシ描き直線文を施す。時期は共に弥生時代中期初頭、畿内第Ⅱ様式であろう。

1244は壺の上半部である。器面調整は内面はナデ調整で仕上げ、外面には太いもの1条、細いもの2条を単位とするクシ描き直線文を施す。弥生時代中期初頭、畿内第Ⅱ様式のもと考えられる。

1245も壺の上半部である。内面調整は剥離しており不明である。外面調整は斜め方向の板ナデで仕上げたものと考えられ、肩部にはクシ描き波状文を施す。時期の確定は難しいが弥生時代中期前半代のものであろう。

1246は肩部に把手を持つ小型の壺、或いは鉢である。形態は厚手の胴部に屈曲して直口気味に立ち上がる口縁部を持つ。復元径は9.0cmを計る。胴部外面は剥離のため調整不明であり、内面はナデで仕上げるが指押さえの痕跡を残す。口縁部はヨコナデで仕上げる。また、成形段階で取り付けた横向きの把手は、胴上半部でも口縁部に近い所に有り、状況から相対する2箇所に取り付けられると考えられる。時期の確定は難しいが、弥生時代前期末から中期前半代のものであろう。

## 2. 北区遺構及び包含層出土土器

前節の通り、個遺跡では北区を中心として弥生時代、及びそれ以降の遺構及び包含層等からの遺物の出土があった。本節では、弥生時代から奈良時代の遺物について取り上げる。

### 弥生時代の土器（1247～1266）

1247は、頸部から口縁部まで残存するのみであるが、前期の広口壺である。細く括れた頸部から強く外反する口縁部と端部で僅かに肥厚する口唇部を持つ。外内面の調整はナデで仕上げる。頸部外面には、3条のヘラ描直線文が施される。1248は前期の壺である。上半部のみであるが、底部から緩やかに開く形態を呈するものである。口縁部は小さく外反し、成形時のものか外内面には指頭圧痕が残る。口縁屈曲部下の外面には、幾分歪んだヘラ描直線文が2条施され、口縁端部にはキザミメを持つ。外面調整としてハケメが残るが、外内面共にナデで仕上げる。1249は、前期の壺の底部であろう。比較的分厚い底部で、外面はタテハケ、内面はナデ調整である。1250は形態不明ながら、高杯の杯部と脚部の接合部と考えられる。全体にナデ調整がなされ、接合部外面には多条のクシ描直線文を施す。時期の決定に若干難があるが、胎土と調整等の点から前期のもので良いだろう。

1251は、壺の上半部である。口縁部は強く屈曲する「く」の字状を呈し、口縁端部で微妙に肥厚して面を成す。調整は磨減により不明瞭だが、外面にハケメを、内面にナデを残す。中期後半のものと考えられる。1252は、壺の上半部である。口縁部はくの字状を呈し、やや肥厚気味の口縁端部を持つ。端面は比較的上側に強く拡張し、2条の縦凹線を施す。胴部外面はタテハケ、内面はナデ調整を行う。中期後半のものであろう。1253も壺の上半部である。やや丸味を帯びた胴部に、比較的分厚な後縁を持つ内彎気味の「く」の字状口縁が付される。口縁端部は上側に拡張する形態を呈するが、貼り付けたものか端部外面に沈線状の痕跡を残す。外面はハケメ、内面はナデ調整である。中期後半のものであろう。

1254は高杯の杯部で、木製高杯を模した形態である。やや浅めの杯部に水平口縁をもつ形態で、口縁端部では短く垂下する。杯部から口縁部へ屈曲する部分には、微妙に内傾する凸帯が付される。中期後半のものである。

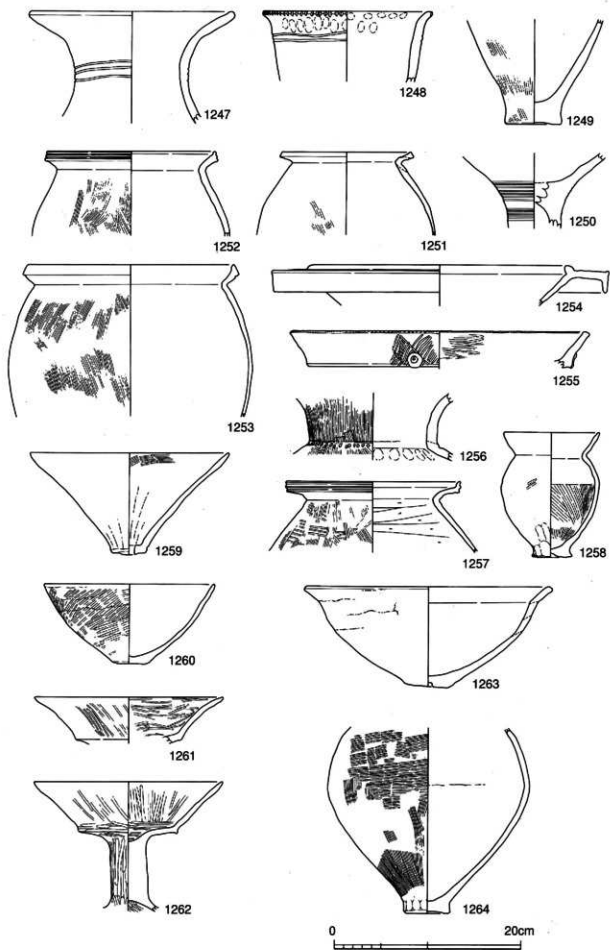
1255は、口縁部のみで器種の確定が困難だが、高杯若しくは器台と考えられる。強く外反した後に屈曲して、開きながら立ち上がる二重口縁状を呈する。外面にはヘラ描き鋸歯文を施し、屈曲部に竹管形円形浮文を貼付する。また、口縁端部はキザミメを持ち、内面には横方向のヘラミガキを施す。後期中葉以降のものとするのが明確でない。1256は壺である。窄まった頸部はやや直口気味に立ち上がりながら外反していく口縁部を呈するものであろう。外面はタテハケで、内面はヨコハケ調整であり、屈曲部内面には指頭圧痕を残す。また、屈曲部外面には刺突列点文が施される。後期のものであろう。1257は甕である。外反する「く」の字状口縁を呈し、上方に強く拡張して面を成す端部を持つ。端面には、2条の縦凹線を施す。胴部外面はタタキの後ハケめで、内面は横方向を基調としたヘラケズリ調整である。後期前半のものであり、瀬戸内系搬入土器の可能性が高い。1258は、完形の小型甕である。卵形を呈する胴部はやや長めに延びる「く」の字状口縁を持つ。口縁部は、やや内彎気味に開き、口縁端部で丸くおさめる。胴部外面には僅かにタタキの痕跡が残り、底部付近に指頭圧痕が見える。胴部内面中位から底部にかけては斜め方向のハケめで、上半部はナデ調整で、口縁部はヨコナデである。後期後半のものである。

1259は、鉢状の形態を持つが、甕形の土器と考えられる。底部からラッパ状に開き、口縁端部は丸くおさめる。底部には焼成前穿孔を持つ。土器本来の形態からは蓋を窺わせるものであるが、底部穿孔の意図を重視して甕とした。外内面にはイタナア痕跡が見られ、口縁部内面には横方向のハケメが残る。後期終末、若しくはそれ以降の可能性もある。1260は鉢である。形態は緩やかに広がる逆円錐台形状を呈するが、底部がやや丸味を帯びた平底になっており、丸底化傾向を示している。体部外面は右上がりのタタキで、内面はナデ調整で仕上げる。後期中葉と考えられる。1261は高杯の杯部である。皿状の体部から屈曲して大きく外反しながら延びる口縁部を持つ。口縁端部は外側に微妙に面をもちながら丸くおさめる。外面は縦方向のヘラミガキで、内面は横方向のヘラミガキを施す。後期終末であろう。1262も高杯である。裾部を欠損しているが、低く短いものであろう。柱状部は中実であり杯部との接合部内面は、大きく窪んでいる。杯部は短く水平の体部に、凸帯状に張り出した屈曲部から真直ぐラッパ状に開く口縁部を持っている。口縁部外内面は縦方向、体部は横方向のヘラミガキで、柱状部は縦方向のヘラミガキである。後期終末のものである。

1263と1264は、同位置での一括出土であり、掘形が明確でないが土器棺(SX101)の可能性があり、出土状況の特異性からも現時点では、その方向での意味付けに重きを置きたい。1263は、大型の鉢である。上げ底状の平底を持ち、やや内彎しながら開き、緩やかに屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は器壁のままの厚みで面を持ちながらおさめる。磨滅のために調整は不明だが、外面に粘土紐接合痕跡が見える。1264は甕である。口縁部は欠損している。底部は、幾分上げ底気味の平底を呈し、底部外面には指頭圧痕が顕著に残る。胴部上半部はやや右上がりのタタキを、下半部は縦方向を基調としたハケメを施す。また、胴部中位内面には接合痕が見える。この様な分割成形等の技法的な面からいっても後期後半以降のものといつて良からう。

1265はS D101出土の完形の壺である。底部は小さな平底をもつものの痕跡程のものであり、従ってやや尖底気味の丸底を呈する。胴部最大径は中位にあり、口縁部において強く窄まる。口縁部は後の廿





第329図 弥生土器

い屈曲部から外反し、上部で若干の面を持つ。胴部外面は下半部を中心にタキの痕跡を残すが、基本的にはハケメの後ヘラミガキ調整にて仕上げる。内面は、全体に横方向を基調としたハケメ調整を行い、口縁部付近では指頭圧痕も残る。その他、口縁部はヨコナデ調整である。また、胴部中位には焼成後穿孔を一箇所施しており、この土器の非実用性（祭祀的な要素）を窺わせる。後期終末のものであろう。

1266は甕である。やや丸味を帯びる小さな平底を持つ卵形を呈する。後の緩い屈曲からやや外反しながら立ち上がる「く」の字状口縁で、口縁端部で上方へ微妙につまみ上げ、丸くおさめる。胴部外面は、上半、下半、底部付近に横方向のタキが入り、底部付近にヨコナデ調整を施す。内面はナデ調整が施されるが、底部内面には工具痕が残るため、板ナデ調整の可能性がある。また、下半部内面には接合痕が残る。口縁部はヨコナデ調整で仕上げる。

#### 古墳時代～奈良時代の土器（1267～1277）

1267は底部を欠損しているが丸底の甕であろう。胴部最大径は中位にあり、緩やかに窄まる。口縁部は直口気味に立ち上がり、端部にかけて若干外反する。胴部外面は、口縁部付近にヘラミガキの痕跡があり、下半部にイタナアを施している。内面は中位を中心に指頭圧痕が集中し、その他はナデ調整で仕上げる。また外面下半部、内面口縁部付近には粘土帯接合痕が残る。古墳時代前期のものであろう。

1268は底部が欠損しているが丸底の甕であろう。器形は卵形を呈し、緩やかに窄まる「く」の字状口縁である。口縁部は直口気味に立ち上がり、口縁端部にかけて外反する。器面調整は磨滅により不明である。

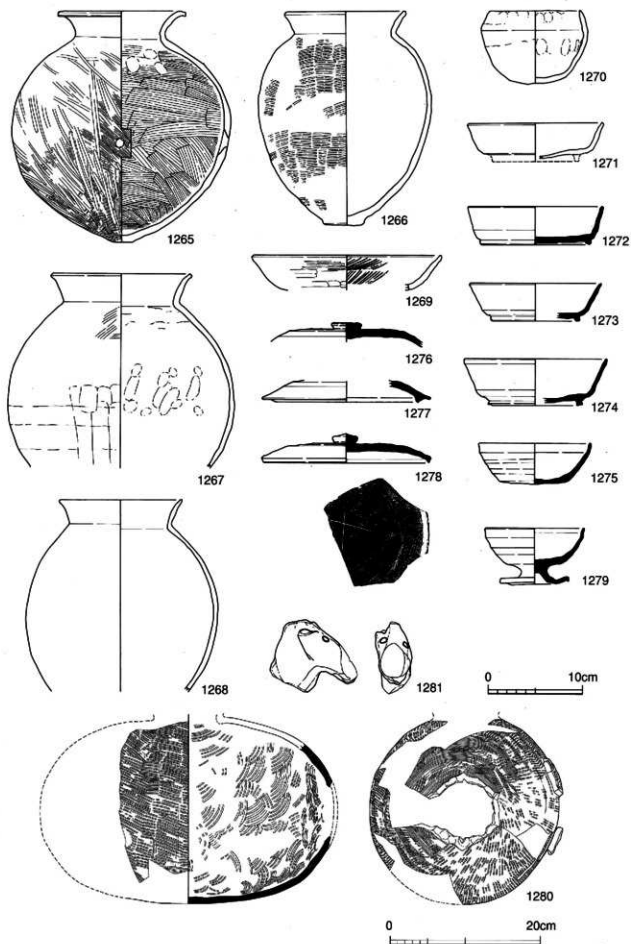
1269は土師器の杯である。底部から微妙に外反しながら開くやや浅めのもので、口縁端部でつまみ出す様な形態を呈する。外面は、口縁部付近と底部付近との単位が幾分異なるものの横方向のヘラミガキを施す。また、内面には、二重の斜行暗文を施す。1270は丸底の無頸甕である。椀状の形態から上半部で若干の稜をもちながら内彎する。器面調整はヨコナデ及びナデで仕上げるが、外内面共に指頭圧痕が顕著に残る。また、体部中位には粘土接合痕が残る。

1271は、製塩土器が一括して出土したS D105から出土したもので、やや外反しながら立ち上がる平底の杯であるが、底部に輪状の剥離痕跡がある事から高台を持つものと考えられる。外内面は共に回転ヨコナデで、底部はヘラ切りである。形態は一見して須恵器をだが土師質であり、須恵器の形態を模倣して本地域周辺で生産した地産物の土師器と考えられる。

1272～1274は須恵器の杯で、杯蓋とセットをなすものである。1272は直口気味に立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。底部には高台を付す。器面は、体部内面から底部付近までを轆轤による回転ナデで仕上げ、底部はヘラギリである。1273は直口気味に開きながら立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部は細身に丸くおさめる。底部には高台を付す。器面は、体部内面から底部付近までを回転ナデで仕上げ、高台部から底部にかけてはナデ調整である。1274は、直口気味に開きながら立ち上がる口縁部を持ち、比較的深めのものである。口縁端部は細身に丸くおさめる。底部には高台を付す。器面は、体部内面から底部付近までを回転ナデで仕上げ、高台部から底部にかけてはナデ調整である。

1275は須恵器の碗である。形態は平底から口縁部付近で内彎しながら立ち上がるもので、口縁端部は丸く納める。器面は、体部外内面を共に回転ナデで仕上げ、底部はヘラ切りの後にナデ調整である。

1276～1278は須恵器の杯蓋である。1276は扁平な宝珠つまみを持つものだが、口縁部が欠損する。器面は、宝珠つまみと天井部及び内面を回転ナデで仕上げ、残存部には回転ヘラケズリが見える。1277は



第330図 古墳～奈良時代の土器・土製品

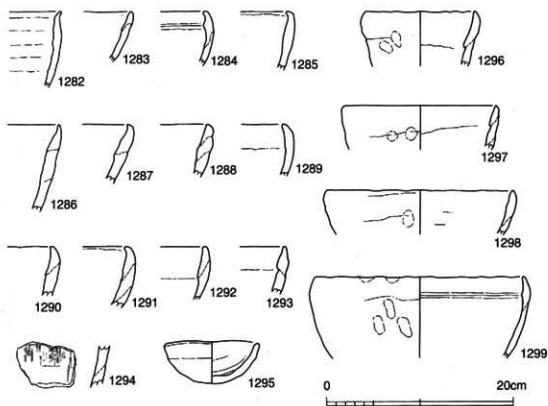
## 第2節 土器

天井部を欠損している。口縁部は厚いカエリを持つ。器面は、天井部に近い部分には回転ヘラケズリが残る。その他の部分は回転ナデである。1278は、扁平でやや小さめの宝珠つまみを持つものである。口縁端部は、つまみ出して外側に面を持つ。器面は、つまみ部とその接合部は回転ナデで、天井部は回転ヘラケズリである。口縁部から内面にかけては回転ナデで仕上げる。また、内面には「×」印のヘラ記号が残る。

1279は、須恵器の高杯である。器形は椀状を呈する坏に低い脚部を付すものである。坏部の口縁端部は丸くおさめる。脚部は端部外側で面を持ち、反り上がりながら延びるため、端部が接地面より若干浮いた状態になっている。坏部上半部外面から内面にかけては回転ナデで、下半部外面は回転ヘラケズリである。また、脚部は回転ナデ調整で仕上げる。

1280は横瓶である。残念ながら大半が欠損しており、口縁部の状況など詳細は不明であるが、概ねこのような形態と考えられる。残存する体部は半分程であるが、その側面は充填していた粘土円盤が接合面から剥離して、孔が開いた状態になっており、接合面付近には指押さえの痕跡が残る。体部外面の調整はタテハケの痕跡も残るが、右下がりの平行タタキが筒状の体部を濃密に巡っている。体部内面は、同心円タタキによる青海波文が残り、後にナデ調整を施す。また、器面調整は側面部の粘土円盤の接合部でのタタキ調整が非常に顕著なのが看守される。

1281は土製の土馬である。形態は僅かに前倒れ気味の頭部のみを表現したもので、鼻部が欠損し、軟質な器面で磨滅しているものの、両目、たてがみ、そして耳の部分などがあり、写実的とは言わないまでも一様にそのものを表現しようとしている。本遺跡における土馬の出土は1点のみで、他に類するものが出土しておらず、同時期遺構内での意味合いは不明であるが、祭祀的性質の濃いものではある。



第331図 SD105出土製土器

## 製塩土器

(多賀)

北区SD105から奈良時代の土器とともに28リットル入りコンテナ10箱の製塩土器が出土している。いずれの個体も二次焼成を受けており、細片化が著しい。全形がわかるものがないので、口縁部の破片を中心に図化している。とりあえず器壁の厚さで1類・2類と分類しておく。

1類(1282～1284・1299)は器壁の厚さが1cm未満の薄手のものである。幅2cmほどの粘土紐を巻き上げ成形する。外面は粗くナデで仕上げ、内面は丁寧にナデで仕上げる。1284・1299は口縁部内面に幅0.6cmの突帯がある。

2類(1285～1294・1296～1298)は器壁の厚さが1.0～1.2cmほどの厚手のものである。口径は12～20cmくらいに復元できる。これも幅2～3cmの粘土紐を巻き上げて成形している。外面は粗いナデ、内面は丁寧にナデで仕上げる。1294のみ外面に縦方向の粗いハケ目が認められる。

1295は1・2類のどちらにも属さない椀形の土器である。口径10cm、高さ4.5cmあり、成形・調整は1・2類と同じである。

## 第3節 木製品

(深江)

## 1. 南区の木製品 (W8~W9)

佃遺跡の南区では弥生時代中期前半の流路 (SD107) を検出し、流路内には杭が並ぶ。

W8はSD107に並ぶ杭状の木製品の内、比較的良好な人為的加工痕跡を残すものである。一方の端部は欠損し、やや剥離する部分もあるが、反対側の端部は、二方向からの削りで先端を尖らす加工を施す。現存長は約20.1cmで、舟形を呈する平面形の最大幅は約3.3cmを計る。

W9はSD107で出土したものである。体部中位ではやや細身になり、両端で若干幅広になる扁平な板状を呈する。長さは約95.4cmで、最大幅は約12.5cmを計る比較的大型のものだが、明確な加工痕があまり見られないため、製品とする積極的な根拠を持ちえないが、形態上の特徴から敢えて板状木製品としておく。

## 2. 北区の木製品 (W10~W13)

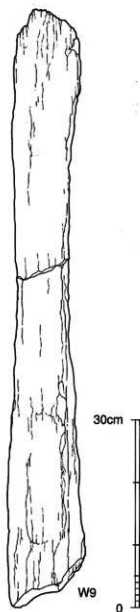
北区の木製品には、奈良時代の流路から出土したものが主として考えられる。

W10は、流路内で出土した棒状木製品である。長さ約24.5cmで、幅は約1.6cmを計り、断面形はその幅を直径とした円形を呈する。その形態は、両端共に丁寧な加工を施すが、一端を鉛筆の先端の如く尖らせ、もう一端を二方向から削り、篋状に加工する。遺存状態が非常に良いのだが、用途は不明である。

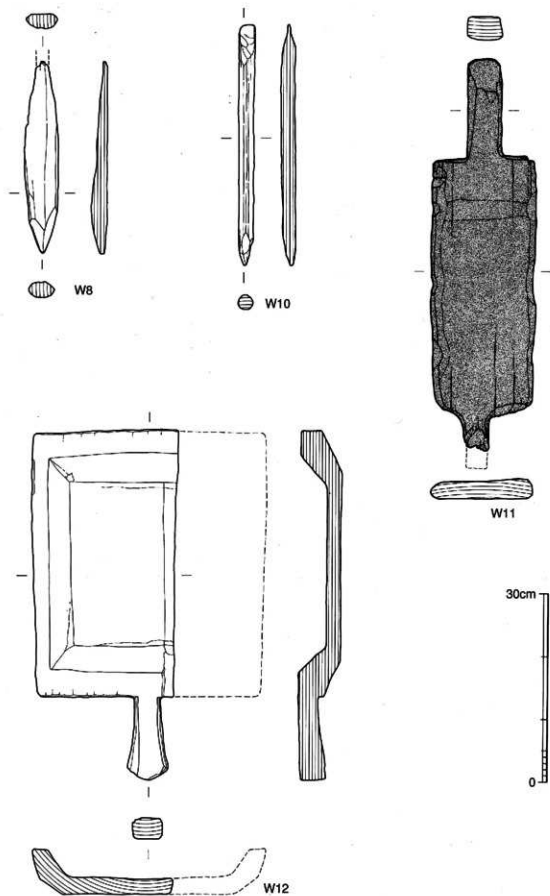
W11は、流路内で出土した木製品で、厚さ約2.1cmの扁平な板の両端から、やはり扁平な棒状突起を持つ形態を呈する。棒状突起の一端は欠損しており、現状長約41.6cmを計る。板状部の一部には、焼け焦げた痕跡が残る。用途が判然としないが、大足状木製品等の農具とも考えられる。

W12は、把手を有する盤状木製品である。本木製品は、確認調査の坪27の青灰色粗砂層からの出土であり、状況から奈良時代の流路付近出土に相当するものと考えられる。盤状容器の本体は、把手を中心として縦長に半分が欠損しているが、長さ28.3cmで、現状幅14.9cm(復原幅24.5cm)の長方形を呈する。くり抜いた容器の内法は断面形が逆台形状を呈し、深さ3.0cmである。また、把手は握りの部分から外側に向かって広がる形態を呈する。

W13は、弥生~奈良時代の南北に流れる流路 (SR101) の東西両掘形に跨がる様に検出された橋状遺構を構成する材である。用材は長短合わせて2~3本を束ねたように出土したが、最も長いもので2.7mを計る。橋としての性格は強いが、用材



第332図 SD107出土板状木製品



第333図 古墳～奈良時代木製品

### 第3節 木製品

としては人為的加工の痕跡が見られず、自然流木を転用したものと考えられる。個別図は遺構のみで示したが、その機能上木製品としても紹介する事とした。